

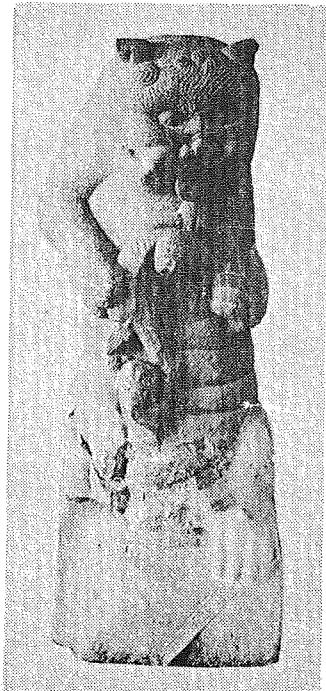
贈

呈

# 沖縄県立博物館

館

報



1973

NO. 6

沖縄県立博物館

## 目 次

序	1
沿革	2
館内案内図	3
機構及び職員構成	4
予算の推移	5
収蔵資料現在高	5
資料購入点数の推移	6
当館所蔵の指定文化財	6
施設使用状況	7
入館者数	9
主なる新収蔵品写真	10
新収蔵資料	12
新収蔵図書	15
博物館主催行事	19
1. 当館所蔵拓本展	19
2. 50年前の沖縄展	20
3. 八重山古墓出土陶磁器展	23
4. 当館所蔵聯・扁額展	24
5. 江原滋氏寄贈陶磁器展	25
6. 岩宮武二写真	26
7. 古我知焼展	27
8. 新収蔵品紹介展	30
主なる来館者	31
職員の活動状況	33
県立博物館関係規則	36

## 研究及び調査報告

### (紹介)

沖縄古窯出土陶片の理化学的分析	宮城 篤正	(41)
コウマツリ磐見	上江洲 均	(49)
※ 表紙写真	玉陵石獅子	

## 序

本年は数多くの催しものが行なわれた。その中でも、「50年前の沖縄の写真展」は、観覧者数18万人を越えるという当館開館以来かつてない記録を出し、かつ観客に大きな感動を与えた。特に沖縄の若い人々に郷土の文化を見なおさせ、誇りをもたせたことは、主催者としてこのうえもないよろこびであった。

また東京、大阪、名古屋、福岡、松山の各地で開催された「沖縄の歴史展」も本土の人々に多大の感銘を与えた。特に沖縄の歴史展は沖縄の古代から現代に至るほんとうのすがたを見ることにより本土の人々に沖縄を再認識せしめた。

かくて、5月15日念願の日本復帰が、かなえられ、復帰と同時に博物館の名称も沖縄県立博物館に改称、新しく出発した。そのうちに館周囲の環境も整備され、秋には「日本古美術展」が行われ、これまた好評をはくした。このほか古我地焼の特別展をはじめ、館自体の小規模の展示会も種々催された。その間、岡山県津山市の江原滋氏から沖縄の古陶器30点の寄贈をはじめ、多くの方々から貴重な文化財や図書の寄贈をいただいた。

こうして博物館の活動は内外にも理解され、お蔭で博物館二階増築の国庫補助が認められ県予算と合せて1億円余を獲得できた。これもひとえに内外の多くの方々のご支援の賜ものと感謝している。

本館報は「琉球政府立博物館々報」を改め、今回から「沖縄県立博物館々報」とし、館の運営、活動状況や学芸員の研究調査、その他について掲載してある。ご覧の上ご指導を賜わりたい。新年度は特に二階増築に重点をおき、皆で力をあわせて外観、内容ともに充実させたいと思う。どうかご支援を賜わりたい。

昭和47年12月30日

沖縄県立博物館長

外間正幸

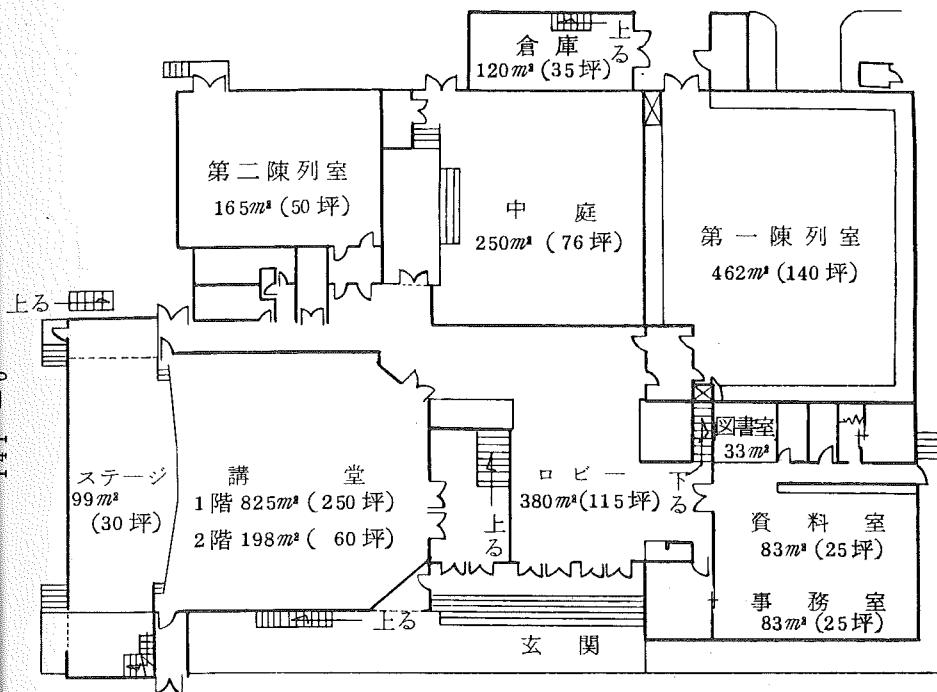
## 沿　　革

(1972年1月～1972年12月)

- 1月 7日 財団法人修養団青年部「沖縄キャラバン」隊、来館を記念して桜20本植樹
- 1月 12日 第二陳列室にて拓本展開催。30日まで。
- 2月 6日 「50年前の沖縄」一写真でみる失われた遺宝一展開催。3月12日まで、公開日数30日間。開催を記念して、ホールにて、鎌倉芳太郎氏・新屋敷幸繁氏の文化講演会とスライドによる「50年前の沖縄」上映及び東洋古典舞踊・胡旋(飛天の舞)上演。
- 2月 26日 「沖縄の歴史展」に所蔵品92件150点貸出す。6月4日無事返納さる。
- 2月 27日 サントリー美術館寄贈の植樹造園譲与式行なわる。
- 3月 12日 「50年前の沖縄」展を記念して、運営委員会から龍柱の台座の寄贈うける。
- 3月 23日 ロビーにて「八重山の古墓出土品」展開催
- 4月 18日 第二陳列室にて聯扁額展開催。6月30日まで。
- 4月 23日 「還って来た沖縄と国際海洋博展」に所蔵品75点貸出す。5月27日無事返納さる。
- 5月 13日 琉球切手原画及び切手類、郵政庁より譲渡さる。
- 5月 13日 沖縄タイムス社より「沖縄文化の資料蒐集とそれによる社会の文化啓蒙に貢献」したことで表彰状授与さる。
- 5月 15日 祖國復帰により「琉球政府立博物館」を「琉球県立博物館」と称す。
- 5月 18日 大阪市立博物館・沖縄タイムス社・朝日新聞社より「沖縄の歴史展」に尽力したことで感謝状授与さる。
- 5月 20日 「沖縄県立博物館」の標札取り付けを行なう。
- 5月 21日 琉球新報社・毎日新聞社より「還ってきた沖縄と国際海洋博展」に尽力したことで感謝状授与さる。
- 6月 22日 二階増築の申請書類、教育庁へ提出。
- 7月 4日 施設10カ年計画書、教育庁への提出。
- 7月 14日 ロビーにて江原滋氏寄贈の新収蔵品公開。
- 7月 20日 第二陳列室にて「岩宮武二写真展」開催9月10日まで。
- 9月 16日 「古我知焼」展開催。10月15日まで。
- 10月 29日 文化庁、沖縄県教育委員会主催の「日本古美術展」開催。11月26日まで。
- 11月 10日 博物館協議会委員辞令交付式行なわる。
- 11月 30日 「おもしろさうし」・「混効驗集」文化庁が調査のため持出す。翌年6月30日まで。
- 12月 14日 第二陳列室にて新収蔵資料紹介展開催。

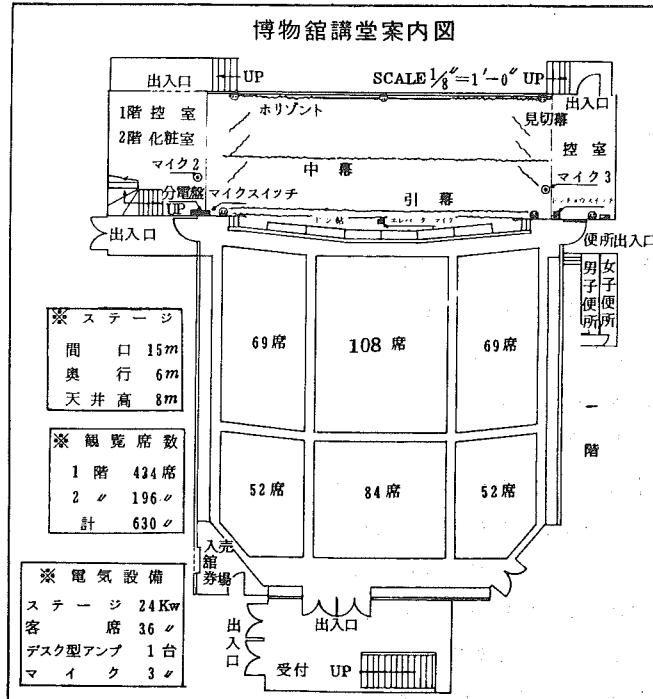
# 館内案内図

197' - 8"



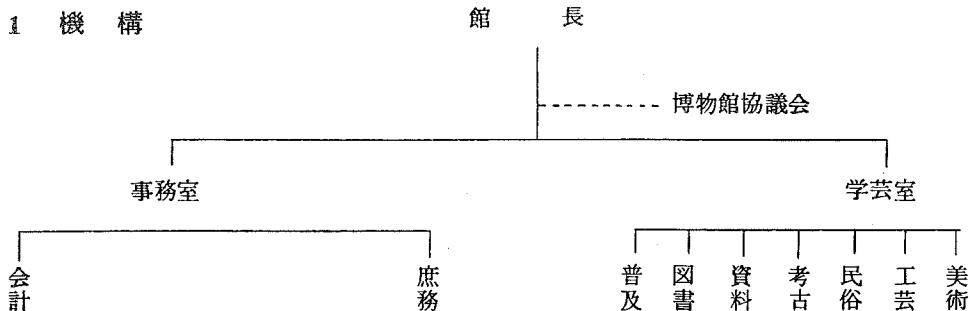
平面図

## 博物館講堂案内図



講堂平面図

# 機構及び職員構成



## 2 職員構成 (昭和48年6月1日現在)

職名	職員数	職員名
館長	1	外間 正幸
学芸職	4	新田 重清(考古) 渡名喜 明(美術・工芸) 上江洲 均(民俗) 宮城 篤正(美術・工芸)
事務職	5	新崎 善清 崎山 孝子 津波古 久子 仲松 正子 武富 千賀子
電気職	1	黒島 慎
作業職	1	与儀 ウシ

## 3 職員の異動状況

転入 新崎善清(公立学校共済組合より)

" 武富千賀子(教育庁総務課より)

新採用 渡名喜 明

退職 大浜用光

## 4 博物館協議会委員 (昭和47年10月30日発令)

学校教育関係	宮里 栄輝(沖縄県教育委員) 仲宗根 繁( " 教育次長)
社会教育関係	高良 鉄夫(琉球大学長) 金城 正光(教育庁社会教育課長)
学識経験者	照屋 寛裕( " 文化課長) 平敷 静男(沖縄県教職組合中央執行委員長) 安谷屋 正量(文化財保護審議会委員) 山里 銀造(文化財保護審議会委員) 新屋敷 幸繁(沖縄大学教授) 稻村 賢敷(那覇市史編修委員)

# 予算の推移

年 度	定 員	当初予算額	内 容		
			運 営 費	資 料 購 入 費	事 業 費
1968年度	11	6,246.3ドル	2,947.3	1,500	3,149.0
1969年度	11	4,541.9	3,929.9	1,500	4,620
1970年度	11	6,796.1	4,176.1	1,200	2,500.0
1971年度	11	4,983.4	4,243.1	1,193	6,210
1972年度	11	4,884.3	4,572.3	810	2,310

# 所蔵資料現在高

(図書資料を除く)

1972年5月14日現在

分類	収藏別	購 入	寄 贈	合 計
A	絵 画	60	29	89
B	書 跡	70	113	183
C	彫 刻	10	182	192
D	建 築	0	5	5
E	陶 磁 器	385	1,232	1,617
F	染 織 器	713	143	856
G	漆 器	154	124	278
H	金 工	8	66	74
I	歴 史	0	7	7
J	貨 弊	1	71	72
K	樂 器	4	15	19
L	装 身 具	64	57	121
M	民 俗	160	406	566
N	考 古	0	80	80
O	そ の 他	2	9	11
X	自 然	0	35	35
合 計		1,631	2,574	4,205

# 資料購入点数の推移

1972年5月14日現在

分類 \ 年度	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971	1972	合計
A 絵画	1	5	1		1							1
B 書跡		1	16									
C 彫刻												
D 建築												
E 陶磁器			1	3		2	24	14			15	1
F 染織器	1		5			2						
G 漆器	1		11	6	3	10	3	2	3	2		
H 金工				1		1						
I 歴史												
J 貨幣												
K 楽器					1		1					
L 装身具					1	1						
M 民俗	1				1	1		1	19		46	2
N 考古												
O その他									1			
X 自然												
合計	4	6	34	13	6	16	28	36	3	63	4	

## 当館所蔵の指定文化財

県指定文化財 (有形文化財)

種別	名 称	員 数	指定年月日	備 考
彫刻	玉陵石彫獅子	1 対	昭 31.12.14	2基各高さ 1.17 m胴廻り 1.21 m
"	木彫円覚寺白象並びに趣意書	1軸 1枚	昭 33. 3.14	全長 120cm頭高 61.2cm胴廻り 93.9cm
"	世持橋勾欄羽目	1 括	"	高さ 33.3 cm横 80.6 cm
工芸	志多伯開鐘	1 挞	昭 30. 5.23	全長 77.2 cm系蔵 3.5 cm重量 440 g
"	黒塗螺鈿遊雁絵大文庫	1 合	昭 31.12.14	高さ 16 cm縦 41 cm横 31 cm重さ 2.29Kg
"	黒塗堆錦山水絵大文庫	1 合	"	高さ 14 cm縦 40.8 cm横 31.7 cm重さ 3.45Kg
"	黒塗螺鈿雲竜文内金箔蓋付椀	1 口	"	高さ 11.8 cm重さ 160 g直徑 12 cm
"	旧首里城正殿前梵鐘	1 口	昭 33. 3.14	高さ 154.5 cm口径 94 cm重さ 600 Kg
"	聞得大君御殿雲竜黄金簪	1 本	"	全面黄金簪重量 21 g全長 28.4 cm直徑 11 cm
"	三味線「江戸与那」	1 挞	昭 33. 8.15	全長 80 cm心長 21.6 cm系蔵 4.8 cm重量 503 g
古文書・典籍	宮古島下地の首里大屋への辞令	1 幅	昭 31.12.14	縦 28.5 cm 横 82.5 cm
"	評定所格認定本「中山世鑑」	6 冊	"	6 卷
"	" 「中山世譜」	1 9 冊	"	19 卷
"	" 「おもろさうし」	2 2 冊	昭 33. 3.14	22 卷
"	" 「混効験集」	1 冊	"	縦 25.5 cm 横 20 cm枚数 227 枚

# 施設使用状況

1972年1月～12月

合計

## 1 講 堂

月 日	使用目的	使用者名	人 員
1. 9	舞 初 会	藤間穂志乃舞蹈道場	4 0
22 ~ 23	文 化 祭	浦添高等学校	1,5 0 0
30	芸能番組制作	O H K	2 0 0
2. 6 ~ 29	「50年前の沖縄スライド」の上映	博物館・サントリー美術館	2 4,0 0 0
3. 5	組踊実演の公開	琉球政府文化財保護委員会	5 0 0
11	研究発表会	沖縄考古学会	1 0 0
12	結成発表大会	那覇地区フォーク愛好会	5 0
19	第18回中央青年祭	沖縄県青年団協議会	4 0 0
4. 8	50年前の沖縄写真展感想文コンクール表彰式	博物館	6 0
5. 7	那覇地区フォーク村コンサート	沖縄フォーク村	6 3 0
6. 3	PTA 総会	城西小学校	2 0 0
18	連盟結成大会	沖縄県高校ギター連盟	4 0 0
25	演 奏 会	琉大ギターアンサンブル	6 0
28	映画上映	沖縄県自主上映委員会	8 0 0
7. 1	組踊記録映画の上映	教育庁 文化課	1 0 0
6	組踊についての講義	琉大国文科	1 0 0
15	講 演 会	首里中学校	2 0 0
16	フォークソング発表会	工業フォーク同好会	2 0 0
20	舞踊のけいこ	比嘉澄子琉舞研究所	1 0
8. 1	ニュース番組制作	N H K	1 5
20.27	沖縄民俗舞踊団けいこ	琉球新報社	3 0
22.30	舞踊けいこ	宮城能造琉球舞研究所	1 0
25.26	舞踊けいこ	宮城美能留舞踊研究所	1 0
29.31	舞踊けいこ	宮城能翠琉舞道場	5
9. 1	舞踊けいこ	古典音楽安富祖流絃声会	1 0
9	三味線・笛のけいこ	沖縄歌舞團	1 0 0
10.19.21.22	日本従断公演リハーサル	南部地区高校家庭クラブ	6 0 0
11.11	研究発表大会	沖縄県教育委員会	1 0 0
23	組踊映画上映	沖縄工業高等専門学校	6 0 0
12.1.~ 2	工業祭クラブ発表	琉球大学	1,2 0 0
8 ~ 10	琉大祭クラブ発表	沖縄言友会	4 0
17	創立一周年記念祭	沖縄県高校家庭クラブ連盟	6 3 0
25 ~ 26	家庭クラブ研究発表大会		

21 m  
り 93.9 cm  
440 g  
直さ 2.29 Kg  
重さ 3.45 Kg  
cm  
Kg  
直径11cm  
cm重量503g

2 第2陳列室

月 日	使 用 目 的	使 用 者 名
1. 12 ~ 1.30	当館所蔵「拓本」展	当 博 物 館
2. 6 ~ 3.12	50 年前の沖縄—「写真で見る失われた遺宝」	サントリー美術館・当博物館
3. 16 ~ 3.19	卒 業 展	琉大美工科
4. 18 ~ 6.30	連・扁額展	当 博 物 館
7. 20 ~ 9.10	岩宮武二写真展	当 博 物 館
9. 16 ~ 10.15	古我知焼展	ヤチムン会・当博物館
10. 29 ~ 11.26	日本古美術展	文化庁・沖縄県教育委員会
12.14 ~	新収蔵資料紹介	当 博 物 館

3 ロビー

月 日	使 用 目 的	使 用 者 名
2. 6 ~ 3.12	50 年前の沖縄—写真で見る失われた遺宝	サントリー美術館・当博物館
3. 23 ~ 7.13	八重山古墓出土品展	当 博 物 館
7. 14 ~ 9.15	江原滋氏寄贈陶磁器展	//
9. 16 ~ 10.15	古我知焼展	ヤチムン会・当博物館
10. 29 ~ 11.26	日本古美術展	文化庁・沖縄県教育委員会
12. 14 ~	新収蔵品紹介	当 博 物 館

# 入館者数

## 1 参観者統計

(1962~1972年)

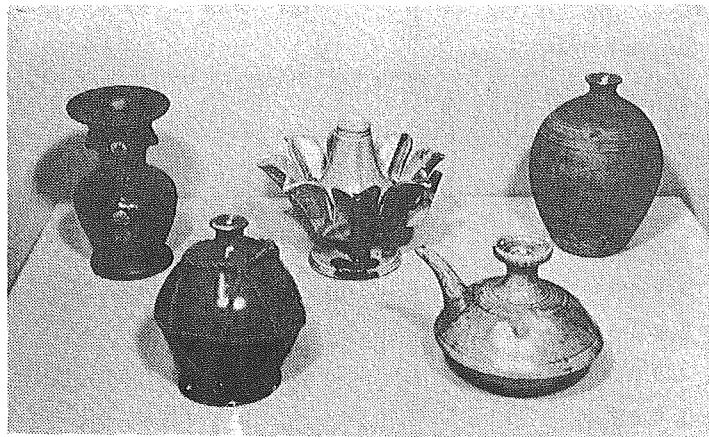
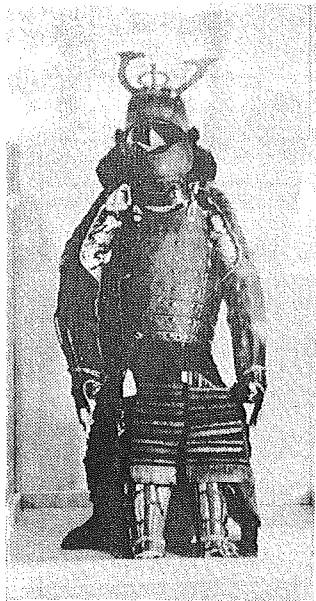
年別	人 数	備 考
1962年	119,437	
1963年	119,281	
1964年	150,935	
1965年	89,593	
1966年	135,386	11月新館開館
1967年	229,464	「日本古美術展」開催
1968年	97,062	
1969年	100,110	
1970年	100,238	
1971年	268,524	「日本古美術展」開催
1972年	308,583	「50年前の沖縄写真展」「日本古美術展」開催
計	1,718,613	

## 2 月別参観者

(1972年1月~12月)

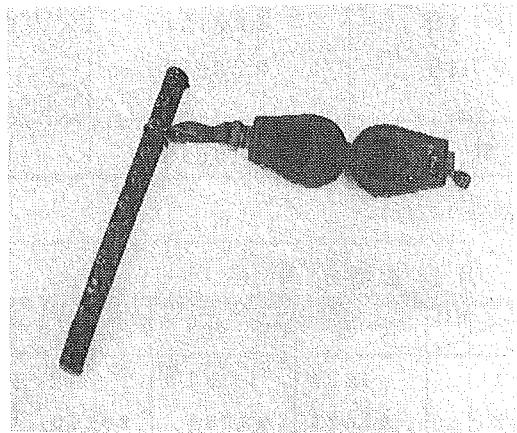
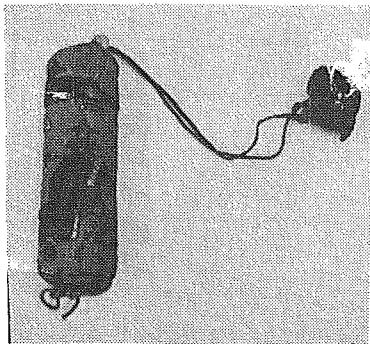
月 項目	大 人	学 生	生 徒	計	開館日数	1日平均	備 考
1	4,234	286	744	5,264	23	229	
2	61,025	23,384	29,155	113,564	23	4,938	50年前の沖縄写真展
3	57,625	22,977	28,346	108,948	24	4,540	"
4	51,63	444	1,273	6,880	24	287	
5	11,924	142	1,133	13,199	24	550	祖国復帰
6	6,533	121	904	7,558	25	302	
7	3,576	626	546	4,748	24	198	
8	6,534	1,802	2,153	10,489	27	388	
9	4,415	358	207	4,980	23	217	
10	7,040	241	2,884	10,165	21	484	
11	9,069	425	5,938	15,432	23	671	日本古美術展
12	3,131	165	4,060	7,356	24	307	
計	180,269	50,971	77,343	308,583	285	1,083	

# 主なる新収蔵品写真



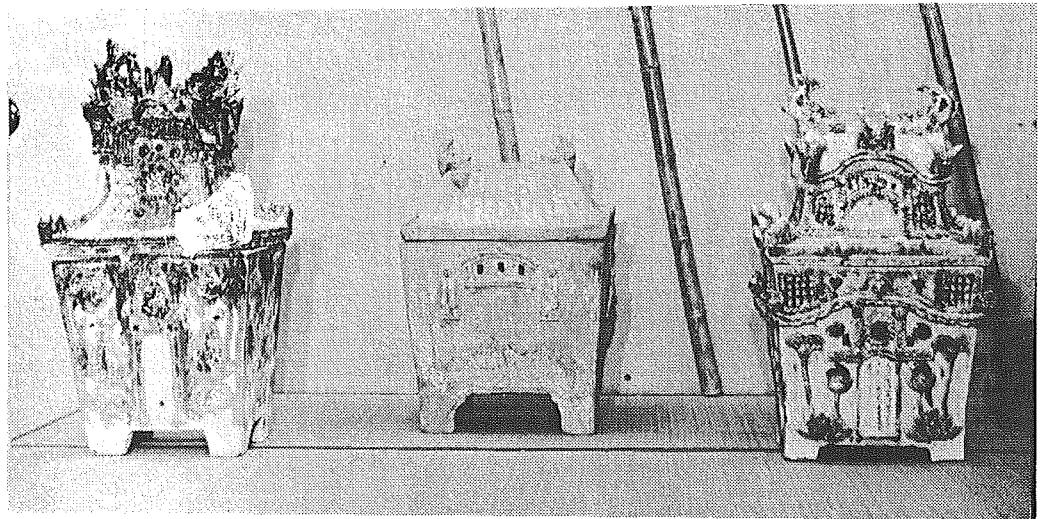
壺屋焼陶器

甲冑

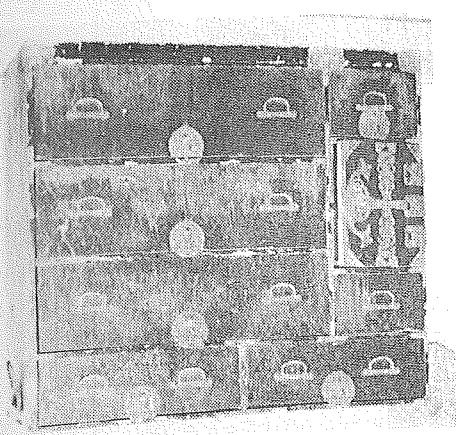


巴紋矢立

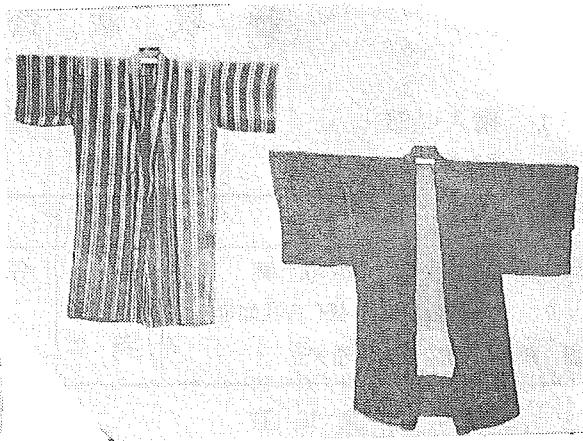
堆錦印籠



御殿型厨子甕



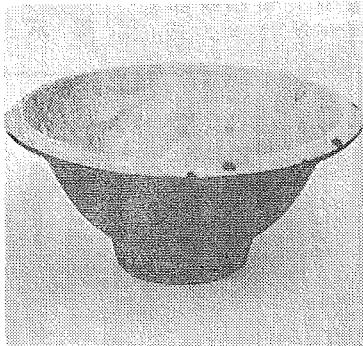
簾 箕



着 物



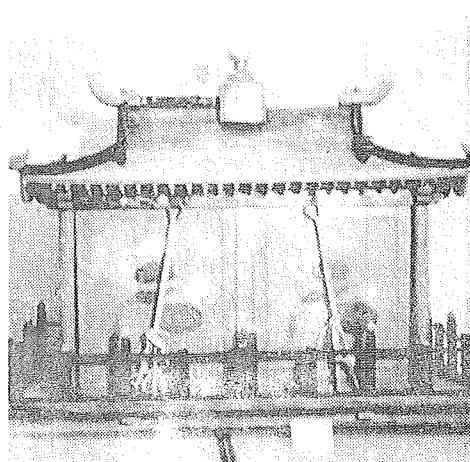
民具類の一部



ワンブー



石 庫 子



龕

# 新 収 藏 資 料

## 1 購入の部

昭和47年1~12

分類	名 称	数 量	備 考
民 俗	古我知焼壺型厨子甕	1	名護市より
"	御殿型厨子甕(古我知焼)	1	"
書 跡	巴文染鹿皮巻矢立	1	京都市より

## 2 寄贈の部

昭和47年 1~12

分類	名 称	数 量	寄贈者名(敬称略)
民 俗	原--名 標 識	1	大里村 伊波盛雄
"	ムチンブサー	1	美里村 大宜見 功
"	メーガナ	1	" "
"	ソーキ	1	" "
"	甕	1	与那城村 浜公民館
"	古タンス	1	那霸市 古謝瑞幸
"	酢壺の蓋(陶製)	1	" 新垣恒篤
"	カキヂ タ	1	
"	石 廚 子 ①	1	美里村 宮城仁徳
"	②	1	" "
"	③	1	" "
"	④	1	" "
"	⑤	1	" "
"	⑥	1	" "
"	⑦	1	" "
"	石 鍬	1	糸満市 金城アキ
"	水字具魔除け	1	本部町 当間恵才

"	芭蕉絹縫着物	1	具志川市	宮里芳子
"	麻絹縫着物	1	"	"
"	木綿縫着物	1	"	"
"	木綿絹縫着物	1	"	"
"	フクター	1	"	"
"	木綿縫着物	1	"	"
"	フクター(木綿縫)	1	"	"
"	木綿絹縫着物	1	"	"
"	フクサ(袱紗)	1	八重山	依光直重
"	マガ一	1	"	"
"	石厨子	1	那覇市	下地勇吉伴
"	"	1	"	大浜安雄
"	弁当箱	1	"	富川貞雄
"	石厨子のフタ	1	海兵隊基地キャンプ	ヴィンセントロ。オネハ
"	ユシ(製塩具)	1	豊見城村	屋良朝勝
"	サシ( )	1	"	"
"	ゾーリン( )	1	"	"
"	ガガイ(鋸)	1	国頭村	宮城重美
"	トウジヤ(鋸)	1	"	宮城安将
"	竹筒	1	"	"
"	水筒	1	"	"
"	ミーカガン	1	"	"
"	タブ	1	"	糸満ヤス
"	ピーモーシレーミ	1	"	"
"	ミツマタ	1	"	"
"	フタマタ	1	"	"
"	カキチ(杵)	1	"	宮城安真
"	ヤンダー	1	"	"
"	平鍼	1	"	"
"	ヒジチ(杼)	1	"	"
"	ペイアミ(網)	1	"	"
"	センバ	1	"	"
"	弁当箱	2	大宜味村	平良慶朝
"	ゼンバコ	1	"	"
"	ガフ(自在かぎ)	1	国頭郡	比嘉青松
"	飯櫃	1	那覇市	平良専明
"	イーゼー	1	"	"
"	ケー(筈)	1	"	"
陶磁器	味噌甕	1	南風原村	普天間敏
"	"	1	"	"
"	素焼(荒焼)壺	1	"	"
"	ゴス染付急順(フタナシ)	1	具志川市	宮里芳子
"	アラマカイ	1	"	"
"	スンカシマカイ	1	"	"

"	"	1	"	"	"
"	皿(磁器プリント)	1	"	"	"
"	皿(磁器プリント)	1	"	"	"
"	釘彫抱瓶	1	岡山県	江原	滋
"	飴釉面取抱瓶	1	"	"	"
"	赤絵唐草文小皿	1	"	"	"
"	赤絵急須	1	"	"	"
"	荒焼印花文からから	1	"	"	"
"	無地抱瓶	1	"	"	"
"	黄釉からから	1	"	"	"
"	赤絵菊花文花生	1	"	"	"
"	コバルト 急須	1	"	"	"
"	三島手からから	1	"	"	"
"	荒焼変形壺	1	"	"	"
"	赤絵花文小皿	1	"	"	"
"	赤絵菊花文壺	1	"	"	"
"	三島手焼締徳利	1	"	"	"
"	スンコロク壺	1	"	"	"
"	飴釉茶碗	1	"	"	"
"	椰子形綠釉壺	1	"	"	"
"	荒焼獅子置物	1	"	"	"
"	三彩幾何模様浮彫壺	1	"	"	"
"	黒釉壺	1	"	"	"
"	荒焼内施釉壺	1	"	"	"
"	綠釉流盃台	1	"	"	"
"	飴釉流鳥浮彫小壺	1	"	"	"
"	綠釉人物浮彫小壺	1	"	"	"
"	動物浮彫耳付壺	1	"	"	"
"	紫泥対瓶	1	"	"	"
"	紫泥獅子面對花生	1	"	"	"
"	綠釉キリン浮彫耳付壺	1	"	"	"
"	白釉ひっかき絵壺	1	"	"	"
"	三島手蓋物	1	"	"	"
漆器	小 盆	1	具志川市	宮里	芳子
"	茶 盆	1	大宜味村	平良	慶朝
絵画	仏画(掛軸)	1	那霸市	仲里	朝春
歴史	甲 胃	1	宜野湾市	泉	松治
書跡	沖縄県庁表札(大)	1	沖縄県庁	(移かん)	

"	(小)	1	"	"	
"	沖縄県表札の建立にあたり	1	"	"	
彫刻	石燈籠(屋根)	1	那覇市		

購入の部

書名	部数	書名	部数
那覇市全国	1	琉歌百選	1
琉球歴史年表	1	比嘉春潮全集(全4)	1
古美術品保存の知識	1	那覇の今昔	1
天然記念物事典	1	那覇今昔の焦点	1
教育関係職員必携	1		

新収蔵図書

寄贈の部

書名	部数	寄贈者名	書名	部数	寄贈者名
世界美術略年表	1	中川伊作	万国博美術展総目録 1~5	5	大阪市立博物館
造船	1	日本造船工業会	博物館ニース(1~10)	10	日本博物館協会
文教時報	1	沖縄県教育庁	明治村通信(22~29)	8	明治村
沖縄の教育 71年度	2	"	徳之島採集手帳 18~20		徳之島郷土研究会
文化庁月報40~43号	4	文化庁	館 報 15号・16号	2	文部省史料館
青い海(2月号~12月号)11		「青い海」沖縄出版KK	国頭村史	1	国頭村役所
大阪市立自然科学博物館々報	1	大阪市立自然科学博物館	春 草	1	山種美術館
あるく、みる、きく 59号~69号	10	日本観光文化研究所	佛教藝術(88号)	1	毎日新聞社
アサヒグラフ	1	アサヒグラフ社	京の四季	1	山種美術館
まつりと子ども	1	菅原道彦	若夏国体県民運動推進資料	1	若夏国体事務局
博物館ニース	1	国立科学博物館	会員交友録	1	滋賀民俗学会
沖縄の伝統染織	1	富山弘基	琉球の古陶 I 古我知焼	1	大城精徳
50年前の沖縄	4	サントリー美術館	展示目録	1	三島市立郷土館
			沖縄関係文献目録	1	沖縄県教育庁

沖縄関係雑誌記事索引	1 沖縄県議会図書室	ゲノミボタルの人工増殖	1 岡崎市教育委員会
京急油壺マリンパーク 水族館年報 4号	1 京急マリンパーク水族館	岡崎市の植物	1 //
博物館案内	1 石垣市立八重山博物館	岡崎の文化財(1~2)	2 //
アイヌ文化展目録	1 埼玉県立博物館	岡崎市遺跡分布調査報告	1 //
無形文化財要覧	1 文化庁	家康のふるさと	2 //
新編 風土記 (首里城周辺)	2 新垣 恒篤	岡崎	2 //
館報	1 釧路市立郷土博物館	おかざき(1971年)	1 //
博物館資料図録	1 佐賀県立博物館	郷土館	1 //
教育沖縄	1 沖縄県教育委員会	郷土館展示品目録	1 //
要覧 47年度版	1 // 教育センター	趣意書	1 //
琉球小話	1 沖縄文教出版株式会社	民藝(233号)	1 日本民芸協会
日立(№5)	1 日本印刷株式会社	ExPO 70 写真集	1 ヤマト運輸KK
首里城内の女たち	1 沖縄文教出版株式会社	日本博物館協会員名簿	1 日本博物館協会
南方文化の探究	1 //	挨喰古墳の研究	1 東京文化史学会
学校基本調査報告書 第15回	1 文教局総務部	越後(小千谷)ちぢみ	1 サントリー美術館
商工季報	1 那覇商工会議所	資料目録 民俗篇その1	1 日本民俗資料館
三浦半島の民俗	1 神奈川県立博物館	館報 №215	1 釧路市立郷土博物館
下総地方の民具第1集	1 成田山靈光館	博物館紀要	1 //
館報№2	1 慶應義塾博物館	館報 第4集	1 市立津山郷土館
72市政要覧	1 那覇市役所	郷土と科学 34号	1 鳥取県立科学博物館
小堀遠州	1 滋賀県立琵琶湖文化館	研究報告(人文科学) 第16号	1 横須賀市立博物館
日本の民俗 沖縄	1 源 武雄	南島研究 第13号	1 南島研究会
兵庫の博物館	1 神戸国際港湾博物館	研究報告 第15巻	1 国立科学博物館
新平家物語と神戸の史跡	1 //	東嶺圓慈	1 滋賀県立琵琶湖文化館
館報	1 //	無形文化財要覧 46年版	1 沖縄県教育庁文化課
// (№11)	2 大阪市立博物館	博物館紀要 7号	1 東京国立博物館
和泉の文化財	1 //	羽地村誌	1 名護市役所
研究紀要 第4	1 //		

琉球の伝説集	1 石川文一	「50年前の沖縄」写真でみる失われた遺宝	1 サントリー美術館
字 誌	1 浦添市大平自治会	用と美(№3~№6)	4 高田一夫
館 報 №1	1 長野県信濃美術館	熱川バナナ、ワニ園研究業績 3月号	1 热川バナナワニ園研究室
年 報 №2	1 佐賀県立博物館	MUSEUM(2月号~10月号)	9 森川不覚
研究報告1月号~5月号	5 市立旭川郷土博物館	SARANIP(№1)	5 //
琉球の焼物	1 石川盛章	友の会々報 №13	1 //
南方土俗展図録	1 市立函館博物館	錢亀古鏡と新資料展図録	1 //
花光コレクション目録	1 //	北海道の偶像(1~3巻)	3 //
明治の風刺画家 図録	1 サントリー美術館	「琉球の文化」第1号 第2号	2 大城精徳
ブリヂストン美術館々報 №20	1 ブリヂストン美術館	手づくりの美(沖縄のくらしと民具)	1 聖教新聞社沖縄支局
資料館概要	1 さきたま資料館	古代の沖縄	1 新星図書
沖縄の植物	1 新星図書	沖縄の芸術家	1 //
「沖縄」丹地敏明写真集	1 丹地敏明	観光沖縄 159	1 沖縄観光連盟
事業報告	1 成田山靈光館	全科協ニース 1971年1~2号 1972年1~2号	4 全国科学博物館協議会
研究紀要	1 武蔵野美術大学研究紀要委員会	博物館だより №1	1 埼玉県立博物館
民俗文化(100~110号)	11 滋賀民俗学会	観覧者実態調査(46年度版)	1 東京国立博物館
博物館だより№27~29	3 神奈川県立博物館	研究報告 第2号	1 山口県立山口博物館
鹿児島民俗 54号	1 鹿児島民俗学会	館 報	2 佐賀県立博物館
中華民国 60年秋季第6号	1 和歌森太郎	女のひとり旅(5) 美術館めぐり	1 小川悠子
琉球電々	1 琉球電信電話局	第19回全国博物館大会報告書	1 日本博物館協会
那覇市史資料篇第2巻	1 那覇市役所	第4回学芸職員研究集会報告書	1 //
研究報告 第6号	1 目黒寄生虫館	博物館の教育活動第2集	1 //
博物館だより№4~№6	3 市立旭川郷土博物館	旅のしおり(東日本編 西日本編)	2 公立学校共済組合沖縄支部
自然科学と博物館 №39~41	3 国立科学博物館	教育の概観 №8	1 沖縄県教育庁
博物館研究	1 日本博物館協会	教育財政調査報告書 №171	1 //
館 報	1 釧路市立郷土博物館	市政早わかり	1 那覇市役所
釧路湿原関係文献目録	1 釧路市立郷土博物館	大福岡展	1 三島 格

沖ノ島 1号	1	宗像大社復興期成会		那霸市史 資料篇 1	1	那霸市役所
耕南時報 4号	1	仲里朝章		琉球史料 №1	1	球陽研究会
なりた №3	1	成田山靈光館				

# 博物館主催行事

## 1. 当館所蔵拓本展

期間：1972年1月12日～1月30日

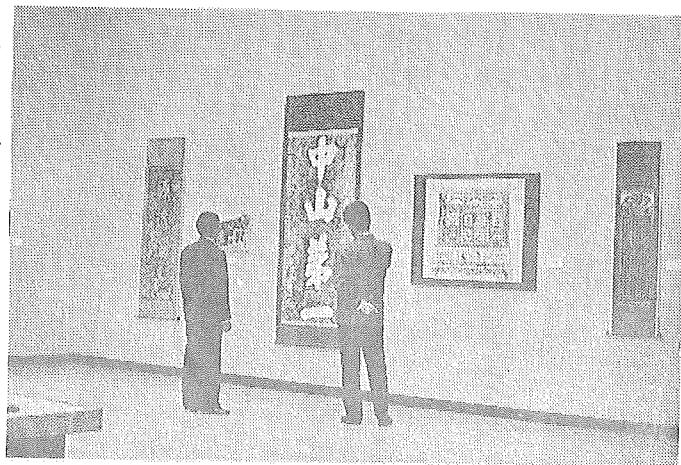
場所：第2陳列室

沖縄最古の石碑といわれる「安国山樹華木記碑」をはじめ、かな文字の「真珠湊碑」、現存の「玉陵碑」、「崇元寺下馬碑」など20余点を展示了。

戦前かなりの数の石碑があったが、戦禍によってその多くを失い、ごく少數を残すのみとなった。当館では、これらの石碑の拓本を展示し、失われたものをあらためて見る機会をつくるべく、1969年に統いて2回目の拓本展を開催した。

### 出品目録

- 安国山樹華木之記碑 宣徳2年(1427年)。沖縄最古の石碑といわれ、園比屋武御嶽の裏にあった。破損しているのを当館に保存。
- 国王頌徳碑 嘉靖元年(1522年)。守礼門近くにあった。残次は当館に保存。
- 崇元寺下馬碑 嘉靖6年(1527年)。2基のうち1基は現存。1基の残次は当館に保存。
- 円覺禪寺記 弘治10年(1597年)。残次は当館に保存。
- 玉陵碑 弘治14年(1501年)。玉御殿の墓庭に現存。
- 真珠湊碑文 嘉靖元年(1522年)。守礼門近くにあったが現存しない。残次は当館に保存。
- ようどれの碑文 万曆48年(1620年)。浦添ようどれの碑。
- 本覚山碑文 天啓4年(1624年)。首里山川の西の玉御殿に現存。
- 円覺寺に題す 1756年全魁書。(全魁は尚穆王の冊封正使として来琉した中国の人)。
- 源遠流長 道光9年(1838年)。首里城龍樋泉近くにあったが現存しない。林鴻年書。(林鴻年は尚育王の冊封正使。)
- 靈脈流券 同治5年(1866年)。龍樋泉近くにあったが現存しない。残次は当館に保存。趙新、干光甲は尚泰王の冊封使。
- 中山第一 康熙58年(1719年)。現存しない。徐葆光書(尚敬王の冊封副使)。
- ※なお、他に浦添ゆうどれ尚寧王陵石棺の石彫拓本も数点展示した。



展示風景

## 2 50年前の沖縄展 ~写真でみる失われた遺宝~ 展

主催 サントリー美術館・当博物館

期間 1972年2月6日~3月12日

会場 第二陳列室・ロビー・講堂



テープカット風景

復帰を目撃にひかえ、美術研究家として著名な鎌倉芳太郎先生によって大正末期から昭和初年にわたって、撮影。保存された首里城・円覚寺を中心とした今はみることができない失われた建造物、工芸品などの写真を公開展示し、新生沖縄の思想的支柱にしたいとの目的で企画されたものである。

会期は30日間で、写真展

と並行してスライドによる「50年前の沖縄」上映と初日から1週間にわたって、東洋舞踊・胡旋(観天の舞)が上演された。

観覧者は、多い時で1日36273人、総計18万人をかぞえ、大盛況を呈した。

### <経過>

1971年10月中旬 「50年前の沖縄~写真でみる失われた遺宝~展」の開催が本決まりする。

1972年 1月5日 「50年前の沖縄展」を開催するにあたり、文化財保護委員会、沖縄教職員組合、那覇市、沖縄タイムス社、琉球新報社、琉球放送、沖縄テレビ、ラジオ沖縄、沖縄放送協会に協賛依頼文書を発送。

1月12日 サントリー的場広報室長及び外間館長協賛団体への挨拶まわりを行なう。

同日午後2時より八汐荘に於いて「50年前の沖縄展」開催についての記者会見を行なう。

1月21日 「50年前の沖縄」展開催について、サントリー美術館と当博物館との間に協約書交換を行う

1月26日 市役所など協賛団体へポスター配布。

1月27日 サントリー広報室小倉忠雄氏、開催準備のため来沖し、ポスター・案内状の発送及び感想文の募集その他運営の具体的な事項について打合わせを行なう。同氏は期間中滞在す。

1月28日 各小中高校に団体見学申込書発送。

1月28日~2月2日 市内各小中高校にポスター類配布。

2月1日 サントリー美術館から「50年前の沖縄展」の写真搬入さる。

2月3日 「50年前の沖縄展」運営委員長的場晴氏、同展の開催準備のため来館。  
2月4日～5日 陳列準備のため臨時閉館。  
2月4日 鎌倉芳太郎氏来館。  
2月5日 オープニング・セレブレーション(参会者約300人)  
2月6日 「50年前の沖縄展」始まる。  
午后から文化講演会行なわれる。  
講師・鎌倉芳太郎氏「私の写した50年前の沖縄」  
新屋敷幸繁氏「庶民史のうえからみた首里」  
2月28日 「50年前の沖縄展」感想文募集要項を各学校に発送。  
3月1日 「50年前の沖縄展」の会期を3月12日まで延長することを協賛団体へ連絡。  
3月3日 感想文審査委員に那覇連合区教育委員会指導主事奥平健氏他10名委嘱す。  
3月12日 「50年前の沖縄展」最終日。入館者36,273人をかぞえている。同展を記念して、運営委員会から龍柱の台座の寄贈うける。  
3月13日 サントリー美術館長佐治敬三氏及び鎌倉芳太郎氏に対し、沖縄文化の向上発展につくした功績をたゞえて行政主席屋良朝苗より感謝状の贈呈がなされた。  
3月13日～14日 「50年前の沖縄展」撤収作業のため臨時閉館。  
3月19日 八汐荘にて感想文の審査会が行なわれる。  
最優秀賞3人、優秀賞9人、運営委員会奨励5人、入選79人を選定す。  
4月8日 「50年前の沖縄展」感想文表彰式行なわれる。

#### <出品目録>

首里城。円覚寺。中城御殿。天尊廟。波上宮。辻原の墓地。崇元寺。那覇市風景。八重山権現堂。首里の獅子舞。歴代国王像。国王服飾品。尚王家の什器。絵画。陶器。漆器。染織等。総点数442点。



円覚寺山門写真前で当時を語る鎌倉芳太郎氏（左）と外間館長（中）的場サントリー美術館広報室長（右）



講堂では、「飛天の舞」が上演され、人気を博した。



会場風景

<入館者数>

月 日	入館者数	月 日	入館者数	月 日	入館者数
2. 6 (日)	1,0368	19 (土)	3,579	3 (金)	3,707
7 (月)	休 館	20 (日)	8,955	4 (土)	5,562
8 (火)	3,632	21 (月)	休 館	5 (日)	15,112
9 (水)	2,543	22 (火)	1,664	6 (月)	休 館
10 (木)	3,508	23 (水)	4,224	7 (火)	ゼネスト のため休館
11 (金)	3,692	24 (木)	3,687	8 (水)	3,426
12 (土)	4,742	25 (金)	3,202	9 (木)	2,605
13 (日)	6,515	26 (土)	4,069	10 (金)	3,986
14 (月)	休 館	27 (日)	8,492	11 (土)	9,698
15 (火)	4,678	28 (月)	休 館	12 (日)	36,273
16 (水)	5,081	29 (火)	3,014		
17 (木)	2,959	3. 1 (水)	1,524		
18 (金)	2,306	2 (木)	3,619	総 計	176,422

### 3. 八重山古墓出土陶磁器展

期間：1972年5月23日～7月12日

会場：第一陳列室（一部）、ロビー

八重山地方からは、この数年来民芸ブームで、いろいろな種類の陶磁器が出土して街の骨董屋の店先に陳列されているのをしばしば見かけることがある。

八重山は、今次大戦でも比較的に被害が少ない地方だけに、古墓なども破壊されずに今日まで残っているのが多い。最近は山地開発が進み、その上 墓の改築、移転、過疎化の波がおしよせている。いまなおおおくの珍しい陶磁器類がひんぱんに発見されており、民芸の宝庫といわれる理由の一端が、その辺から伺い知ることができる。

1972年2月に八重山古墓出土の陶磁器（総数で499点あり、そのうち簪6点を含む。）がまとめて当館に収まった。

これらの資料の出土地は波照間島と与那国島の二島からで、これだけまとまった資料がいちどに得られたことは、今後の八重山地方の文化を研究する上から貴重なものであることは言を俟たない。

今回は、その資料の中からおよそ250点を陳列し、一般に公開したが、なかなかの好評であった。

#### ＜主な出品内容＞

##### A. 琉球の陶器

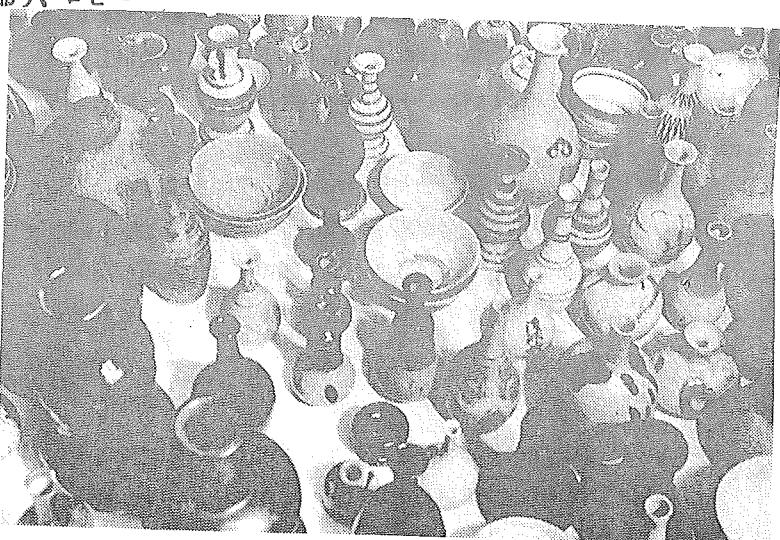
急須、対瓶、嘉瓶、徳利、渡名喜瓶、花生、瓶子、アンダガーミ、からから、マカイ（碗）、燈明台、シビン、皿、パナリ焼壺類、八重山焼（急須、徳利）荒焼徳利、油壺、盃、火取

##### B. 九州の陶磁器

伊万里染付徳利、対瓶、壺、碗、薩摩茶碗、油壺

##### C. 南支、安南系

安南染付碗、南蛮甕



展示品の一部

者数  
707  
562  
112  
館  
スト  
休館  
426  
605  
986  
698  
,273

## 4. 当館所蔵聯・扁額展

期間： 1972年4月18日～6月30日

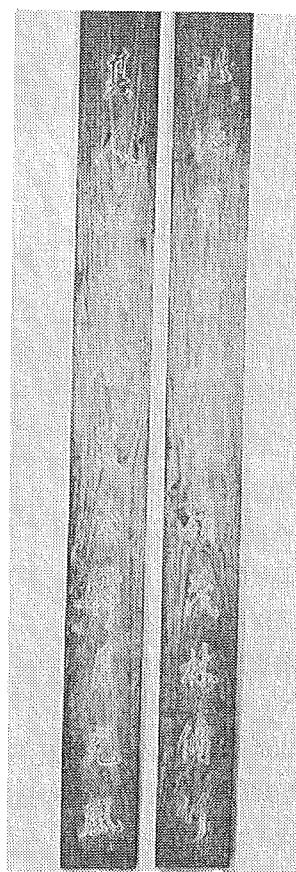
場所： 第2陳列室

寺社や御殿、殿内のような高貴の家にあつた多くの聯や扁額が、戦災にあい散逸した。当館にはかろうじて残ったものや破損したのが収集され、収蔵されている。その中から展示に堪えるもの約25点を出した。

これらのはほとんどが中国の冊封使またはその随員である。最も古いのでは12世紀の朱熹の書を彫った扁額がある。その他、1606年に尚寧王の冊封使として来流した夏子陽の隨員何冠英の扁額をはじめ、徐藻光、周煌など中国の著名な学者であった冊封使の書も含まれている。

### ＜出品目録＞

- 存忠孝心 朱熹(1130～1200)書。中国宋代の偉大な哲学者。晦翁の号が記されている。40×127cm
- 志立 朱熹の名が記されている。44.5×92cm
- 忠勤啓浚 何冠英書扁額。尚寧王の冊封使夏子陽の隨員。万曆34年(1606年)来流した中国の人。33×105cm 一部破損。
- 龍王殿 鄭遇書。那覇久米村の人。有名な謝名親方鄭どうの弟といわれる。若狭町にあつた天尊廟龍王殿の額。62.5×139cm
- 凌雲 林麟鳴書。1683年尚貞王の冊封正使として来流した中国福建省の人。325×130.5cm
- 聯 徐藻光書。1719年尚敬王の冊封副使として来流した。「中山伝信錄」で知られる学者。17×110.5cm(1対)。
- 致和 尚敬王書。1738年。西原村の内間御殿にかげてあるもの。破損してある。53×128cm
- 莊嚴國土 周煌書。1756年尚穆の冊封副使として来流した中国の人。62×182cm
- 聯 周煌書。18×27.8cm
- 善淵堂 王文治。冊封使全魁、周煌の隨員として来流した中国の詩人。「王夢樓詩集」で広く世に知られた。52×118cm
- 聯 鄭孝德書。久米村の人。北京の国子監で学んだ。1798年官生騒動にまきこまれた歴史上の人物。131.5×15.8cm(1対)
- 聯 趙文楷書。1800年尚溫王の冊封正使として来流。126.5×21.5cm
- 聯 季鼎元。1800年冊封副使として来流した。この聯は諱名圓にかげてあつた。67.5×14.5cm
- 聯 林鴻年書。1838年尚育王の冊封正使として来流した。129×25.5cm
- 海山一覽 林鴻年書。44×136.5cm
- その他、護国寺扁額円覚寺の鳳凰浮彫2点、龍浮彫、獅子、波に魚、牡丹などの彫刻類も間に展示した。



聯 周煌書

## 5. 江原滋氏寄贈陶磁器展

期間： 1972年7月14日～9月15日

会場： ロビー

去年の1月に岡山市で行な

われた「沖縄の観光と物産展」  
をみて、長年愛蔵してこられた琉球陶器（30点）を寄贈  
したいと新聞社を通じて申し  
入れがあつた。

その篤志家は、岡山県津山  
市田町在住の江原滋氏（医師）  
であった。その頃は、沖縄の  
本土復帰を控えいろいろな催  
しがあつたが、なかでも「沖  
縄の歴史展」（東京、大阪、  
名護屋、松山の五会場）は大  
規模な展覧会であつた。

その大阪会場の場合は館長

が出張したが、その際、岡山まで足を運び寄贈品を見せて貰い、受諾した。

寄贈目録は下記の通りであるが、なかには、抱瓶、赤絵急須、花生、小皿、三島手蓋物などの優品も含まれ、しかも、二点を除いて、他はすべて琉球陶器であり、大部分が壺屋窯で焼かれたものであつた。

なお、それらの陶器が当館に届くまでの手続きや輸送費については、岡山市天満屋と琉球新報社が負担するなどお世話をいただいたことを記して感謝の意を表します。

### <寄贈目録>



寄贈品の一部

番号	名称	寸法	窯		名称	寸法	窯
1	釘彫抱瓶	高さ 12.1	壺屋窯	1 6	飴釉茶碗	高さ 6.8	壺屋窯
2	無地抱瓶	高さ 11.1	"	1 7	緑釉椰子型壺	高さ 14.2	"
3	飴釉面取抱瓶	高さ 11.2	"	1 8	荒焼獅子置物	高さ 6.7	"
4	赤絵唐草文小皿	高さ 4.5	"	1 9	三彩幾何模様浮彫	高さ 15.1	壺屋窯
5	赤絵急須	高さ 8.2	"	2 0	黒釉壺	高さ 16.6	湧田窯系
6	荒焼印花文カラカラ	高さ 9.9	"	2 1	荒焼壺	高さ 17.4	壺屋窯
7	黄釉カラカラ	高さ 11.4	"	2 2	緑釉流壺台	高さ 14.5	"
8	赤絵菊花文花生	高さ 15.3	"	2 3	飴釉鳥浮彫小壺	高さ 10.4	"
9	コバルト釉急須	高さ 17.5	"	2 4	緑釉人物浮彫小壺	高さ 10.9	"
1 0	三島手カラカラ	高さ 8.0	壺川窯系	2 5	動物浮彫耳付壺	高さ 22.4	"
1 1	荒焼変形壺	高さ 15.9	壺屋窯	2 6	紫泥獅子面付花生	高さ 16.6	"
1 2	赤絵菊花文壺	高さ 16.7	"	2 7	紫泥対瓶	高さ 20.2	"
1 3	赤絵花文小皿	高さ 4.2	"	2 8	緑釉キリン浮彫耳付壺	高さ 19.7	"
1 4	三島手素焼徳利	高さ 18.0	"	2 9	白釉壺	高さ 18.6	南支那系
1 5	スンコロク壺	高さ 14.9	スワンカローク窯	3 0	三島手蓋物	高さ 9.7	壺屋窯

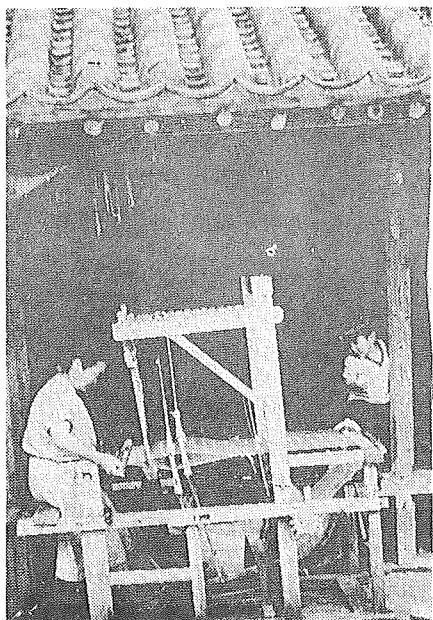
## 6. 岩宮武二写真展

期間： 1972年7月20日～9月10日

会場： 第二陳列室

1966年4月から5月にかけて、戦争によって徹底的に破壊された沖縄に、岩宮武二氏は「沖縄でない沖縄」をとらえるために久高島をはじめ沖縄各地久米島・宮古島・石垣島等を廻り、自然や風物伝統工芸等を同氏の情熱と芸術的感覚で取材され、これらの写真はご好意により、すべて博物館に寄贈された。

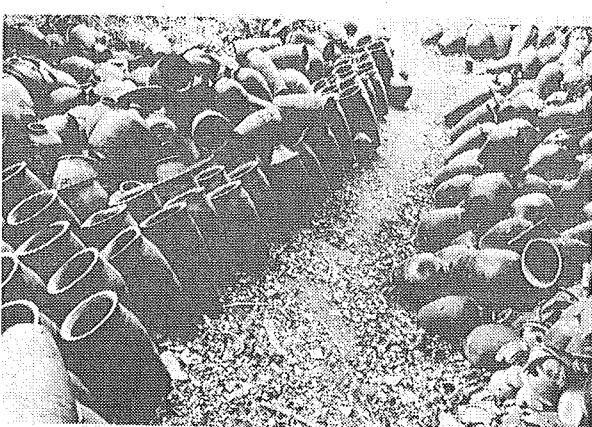
これらの写真類の中から60点余選定して出陳したもので、観覧者から好評をうけた。



機織り



瓦づくり



壺屋風景



籠づくり

## 7. 古我知焼展

期間： 1972年10月16日～11月15日

会場： 第一陳列室（一部）、第二陳列室、ロビー

〔沖縄で  
然や風物  
館に寄贈  
〕  
古我知焼は一種独特な技法  
で知られた沖縄の古陶器のひ  
とつである。しかし、確かに  
「もの」そのものと窯跡は知  
られているが、果して、いつ  
誰によって開窯されたか、と  
いうような歴史は不明であり、  
また、なんら文献の記述もな  
い。

古我知の窯跡は旧羽地村現  
名護市）の広々とした田園地  
帶（沖縄一広い田園地帯で俗  
に「はねじたあぶつくわー」  
と称する。）の西側の小高い

丘陵地帯の中腹に位置している。そのあたりからは、粘土分の多い白土などの良質の陶土が豊富に採  
掘出来、また、水あり、薪（松）ありで窯場としての立地条件は実に理想的である。

今日、古我知焼がおおく世に流布した直接の原因を考えると、まず、戦後といってもここ数年来異  
常なまでの陶器（民芸）ブームが巻き起ったことや、外国移民や都市地区への移住、山地開墾、墓の  
移転や改築等の諸条件によることが多い。

上記の現象によって、戦前ではめったに見かけなかった古我知焼の壺や甕類が、想像以上に出廻わ  
る結果をまねいている。

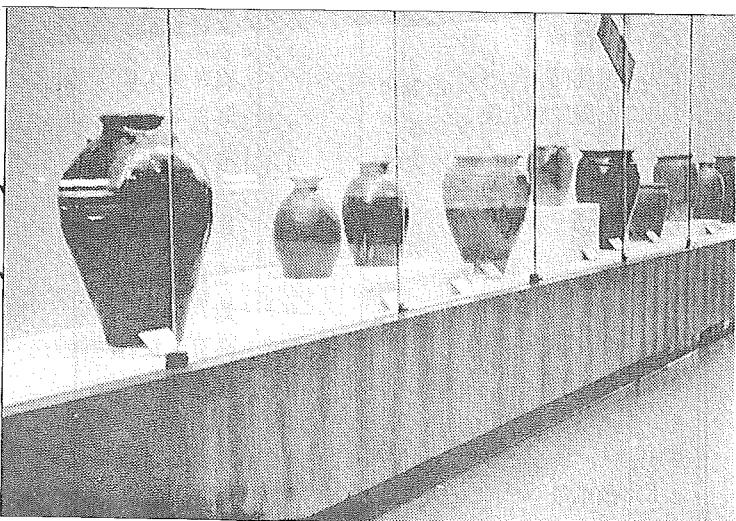
なお、沖縄が本土復帰直前にこの古我知窯跡は県文化財（記念物）指定を受けたが、窯跡の指定は  
これがはじめてのことであった。

その様な状況下にあって、ヤチムン会員をはじめ、全琉にまたがるコレクター所蔵の古我知焼を一  
堂に集めて展覧することによってその全貌を浮き彫りにすることは誠に意義深くかつ絶好のチ  
ャンスでもあった。

そのような訳で、今回、古我知焼の特別展が開催されたが、今期中、愛陶家などがつめかけ賑わつ  
た。

### 〈出品目録〉

番号	品 名	寸 法(cm)	所 有 者
1	水盤	高さ 7.7	大宜味村 新崎康生
2	縁釉壺	高さ 7 3.2	本部町 謝花良政
3	飴釉大壺	高さ 7 1.0	// //
4	アンダガーミ	高さ 3 0.5	// //
5	御茶湯茶碗並びに茶卓	高さ 1 0.7 (茶碗)	// //



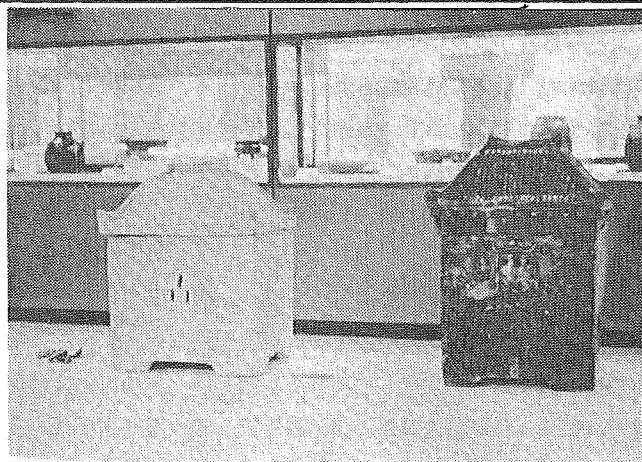
古我知焼展会場

6	素焼壺	高さ 5 2.4	本部町 神元繁弘
7	飴釉徳利	高さ 1 9.3	本部町 真喜屋実光
8	黒釉〃〃	高さ 2 0.3	" "
9	アンダガーミ	高さ 3 1.8	" "
10	素焼壺	高さ 3 8.5	" "
11	繩目文水甕	高さ 6 5.5	与那城村 長堂察
12	手水鉢	高さ 2 7.5	" "
13	芋摺り	タテ 1 6.0	読谷村 国吉清尚
14	素焼桶	ヨコ 9.3	" "
15	御殿型厨子甕	高さ 3 8.0	" "
16	アンダガーミ	高さ 7 1.0	那覇市 新里善福
17	素焼壺	高さ 3 4.4	那覇市 宮里栄輝
18	クワデーサ釉壺	高さ 3 5.2	" "
19	茶卓(1対)	高さ 4 7.9	" "
20	飴釉水甕	高さ 1 0.1	浦添市 久貝恵吉
21	アンダガーミ	高さ 3 5.2	" "
22	飴釉壺	高さ 1 8.1	" "
23	黒釉壺	高さ 4 0.5	" "
24	〃〃	高さ 4 7.5	" "
25	鉄釉壺	高さ 4 2.1	" "
26	飴釉壺	高さ 3 7.3	" "
27	壺	高さ 3 4.9	" "
28	飴釉水甕(小)	高さ 3 7.5	" "
29	壺	高さ 3 5.5	" "
30	壺型厨子甕	高さ 2 8.7	那覇市 具志堅政治
31	御殿型厨子甕	高さ 7 8.5	宜野湾市 石川盛昇
32	素焼御殿型厨子甕	高さ 7 6.0	" "
33	素焼壺型厨子甕	高さ 6 1.5	" "
34	〃〃	高さ 4 3.5	" "
35	壺型厨子甕	高さ 5 8.0	" "
36	飴釉水甕	高さ 5 5.5	" "
37	御殿型厨子甕	高さ 5 8.0	那覇市 大嶺実清
38	水甕(小)	高さ 6 8.0	" "
39	飴釉鉢	高さ 3 4.5	某氏
40	素焼鉢	高さ 1 2.3	" "
41	水甕(小)	高さ 9.0	" "
42	素焼鉢	高さ 3 9.5	" "
43	壺型厨子甕	高さ 1 2.5	" "
44	〃〃	高さ 6 3.5	" "
45	アンダガーミ	高さ 8 3.0	" "
46	飴釉壺型厨子甕	高さ 1 7.8	那覇市 德山盛彦
47	〃〃	高さ 7 3.0	那覇市 平良邦夫
48	〃〃	高さ 7 4.5	" "
49	壺型厨子甕	高さ 6 7.5	" "
50	〃〃	高さ 4 7.5	" "
		高さ 6 3.5	" "

弘光  
察尚  
福輝  
吉  
治昇  
清

彦邦夫

5 1	〃 〃	高さ 7 2.5	〃 〃
5 2	〃 〃	高さ 4 6.0	那霸市 知念松郎
5 3	飴釉壺	高さ 3 4.5	佐敷村 普天間
5 4	素焼水甕	高さ 4 9.6	〃 〃
5 5	〃 壺	高さ 6 5.3	〃 〃
5 6	飴釉徳利	高さ 3 3.7	〃 〃
5 7	鉄釉鉢	高さ 1 2.0	〃 〃
5 8	素焼鉢	高さ 1 0.5	〃 〃
5 9	飴釉壺	高さ 3 1.1	〃 〃
6 0	飴釉徳利(窯跡出土) 2点		名護市 翁長恵子
6 1	飴釉壺	高さ 3 7.0	与那原町 金城珍栄
6 2	素焼徳利	高さ 1 7.5	那霸市 新垣世
6 3	飴釉壺	高さ 7 8.0	〃 〃
6 4	トウチ(窯道具)	高さ 1 5.0	〃 〃
6 5	水 甕	高さ 6 1.0	コザ市 城間喜宏
6 6	飴釉鉢	高さ 1 3.0	〃 〃
6 7	クワデーサ水甕	高さ 6 7.0	〃 〃
6 8	素焼水甕	高さ 3 8.0	〃 〃
6 9	飴釉鉢	高さ 1 2.7	〃 〃
7 0	鉄釉水甕(小)	高さ 3 6.5	〃 〃
7 1	クワデーサ水甕	高さ 3 5.5	当館所蔵
7 2	飴釉水甕	高さ 6 6.0	〃 〃
7 3	耳付花生	高さ 1 7.0	〃 〃
7 4	壺型厨子甕	高さ 6 8.0	〃 〃
7 5	御殿型厨子甕	高さ 5 8.5	〃 〃
7 6	壺型厨子甕	高さ 7 9.5	〃 〃
7 7	〃 〃	高さ 5 9.5	〃 〃
7 8	〃 〃	高さ 5 9.5	〃 〃
7 9	壺型厨子甕	高さ 6 9.0	〃 〃
8 0	御殿型厨子甕	高さ 6 8.5	〃 〃
8 1	はかりのおもり 2点		〃 〃
8 2	各種陶片資料		当館、宜野湾市 翁長自修

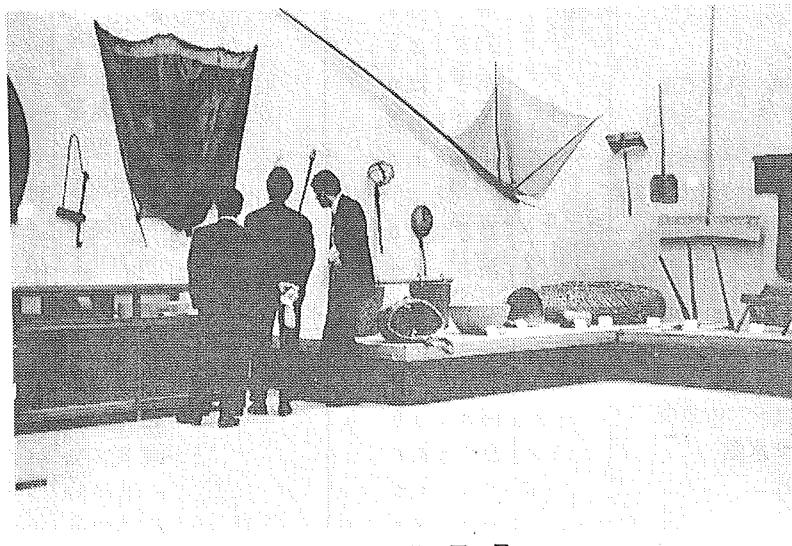


古我知焼展会場

## 8. 新収蔵品紹介展

期間： 1972年12月14日～1973年2月28日

会場： 第二陳列室、ロビー



展示場風景

過去一ヶ年間にわたり、当館が寄贈を受けた資料や購入資料のなかから、84点を展示したものである。

展示は主に、民俗資料で占め、それらの殆んどは調査ならびに資料集収の際に、一般から寄贈を受けたものであった。

最近に至っては民芸ブームにより、かなり以前に比べると、寄贈を受ける数は少なくなった。

しかし、年間の文化財資料購入予算の少ない当館では、どうしても一般の方々の協力を得なければ集まりにくい実情である。今後とも一層の協力と博物館活動の意義を広く一般に理解して貰うための努力を払う必要があろう。

今回の催しは、過去1ヶ年間で当館に資料をご寄贈くださった方々に対するお礼とそのご芳情に報いる意味をも含めての紹介展であった。

なお、主なる内容は下記の通りであるが、資料寄贈者のご芳名は、同館報の「新収蔵資料」寄贈の部をご参照ください。

### <出品内容>

1. 絵画(軸物) 1点	7. 陶製厨子甕	9点
2. 袴紗 1点	8. 龜	1点
3. 漆器 4点	9. 甲冑	1点
4. 矢立 1点	10. 着物	8点
5. 陶磁器 7点	11. 民具	36点
6. 石厨子 7点		

## 主なる来館者（1972年1月～12月）

- 1月 神奈川県立博物館学芸部人文課長 和田正洲氏。財団法人修養団青年部主任塚本智雄氏。  
三越本店取締役 杉田忠義氏。同副部長 田辺寿氏。学習研究社A.V局映画製作部 定村  
武士氏。東京新聞、中日新聞那覇特派員 佐野桂次氏。同三上幸雄氏。日展会員 中村晋  
也氏。文化庁次長 安達健氏。文化財保護部管理課長 宮野禮一氏。
- 2月 雇用促進事業団副理事長和田勝美氏。日本教育新聞報道部長 鎌田元秀氏。日本工芸会会  
員 鎌倉芳太郎氏。大蔵省理財局資金管理課長 玉置博氏。京都民芸協会 林弥衛氏外14  
名。大阪市立博物館学芸員 岩井宏実氏。同神山登氏。熊本県副知事 小山岑雄氏。高等弁  
務官 ランパート氏夫妻。東京教育大学教授 和歌森太郎氏。前文部大臣瀬尾弘吉氏。福  
祉新聞社社長 黒木利克氏。総理府事務官 佐藤仁一氏。下水道公社理事 真喜志興雄氏。  
サントリー美術館長 佐治敬三氏。
- 3月 「50年前の沖縄写真展」運営委員長の湯晴氏。文化庁文化財保護部管理課 根本栄夫氏。  
同文化普及課長 土生武則氏。内閣総理大臣官房総務課内閣担当課長補佐 田中宏樹氏。  
文化庁文化部長 吉里邦夫氏。同文化財保護部無形文化課長 福田安男氏。東北大学教授  
中川久夫氏。大阪商業大学助教授 吉田昭作氏。展示科学研究所副所長 神吉定氏。
- 4月 文化庁美術工芸課長 浜田隆氏。文部技官 鶴塚泰光氏。東京ガバナーレムレッラー氏  
毎日新聞社 里見健一氏。大和運輸大阪出張所長橋本秀男氏。版画家中川伊作氏。伊勢民俗  
学会会長 堀田吉雄氏。沖縄三越常務取締役店長 田辺壽氏。島根県副知事 里田美雄氏。  
芥川也寸志氏。草柳大蔵氏。瞬報社竹野勝也氏。拓本研究家 広瀬栄一氏。日本経済新聞  
社々長 円城寺次郎氏。沖縄振興開発金融公庫理事長佐竹浩氏。福岡高等検察庁検事長武内  
孝之氏。福岡高等裁判所長官 江里口清雄氏。同長官秘書官 千代田義則氏。同事務局長  
安部剛氏。日本赤十字社副社長 田辺繁雄氏。日本赤十字社 梅崎克己氏。武藏野美術大学  
教授水尾比呂志氏。ピアノ弾きがたり 仲吉史子氏。沖縄国際海洋博覧会協会 佐野勝彦氏。  
東京高等検察庁検事総長 竹内寿平氏。
- 5月 大阪市立博物館長平山敏治郎氏夫妻。考古学者リチャードピアソン氏。インガソル駐日米  
大使。美術図書出版株式会社 フジアート出版代表取締役 前田忠雄氏。日本学術会議会  
長 越智勇一氏。
- 6月 日本専売公社総裁 北島武雄氏。日本共産党中央委員長 宮本頤治氏。
- 7月 福岡高等検察庁検事長 武内孝之氏。天理参考館学芸員 白木原和美氏。日本の味を守  
る会理事長 近藤弘氏。朝日新聞社 吉田喜一郎氏。福岡高等裁判所人事課長 笠俊文氏。  
沖縄タイムス社専務取締役 松村実氏。石垣市立八重山博物館々長波 名城泰雄氏。成城  
大学教授 大藤時彦氏。国学院大学教授 白田甚五郎氏。在沖米国総領事館広報文化局  
ウイリアム・ペーンズ氏。大阪芸術大学教授 村松寛氏。福岡高等検察庁総務部長 山本  
新氏。那覇地方検察庁検事正 安田道夫氏。
- 8月 沖縄における朝鮮人虐殺調査団朝鮮大学校教員 鄭晋和氏。弁護士 堀川末子氏。行政管  
理庁監察局長 小林寧氏。同庁調整課長補佐 竹内幹吉氏。大阪商工会議所業務課長 尾  
崎弥三郎氏。日本工芸館々長 三宅忠一氏。平田栄三郎氏。衆議院文教委員会委員長 渋谷  
直蔵氏。同理事 久保田円次氏。渡辺栄一氏。山田太郎氏。同委員 川村繼義氏。安里積

- 千代氏。文部省総務課 岡本清氏。
- 10月 版画家 中川伊作氏。徳之島岩井記念博物館々長 岩井正一氏。前国務大臣 山中貞則氏夫妻。サンケイ新聞社支局長 藤井勇氏。秋田県議会議員 8名。作家 石野径一郎氏。画家 佐々木一郎氏。沖縄開発庁政務次官 中津井真氏。自治大臣 福田一氏。沖縄県副知事 宮里松正氏。総理府恩給局審議室長 海老原義彦氏。同総務課課長補佐 横山正道氏。西表民芸館長 那根武氏。文化庁調査官 鈴木友也氏。文部技官 大山仁快氏。文化庁文化財鑑査官 倉田文作氏。
- 11月 井伊文子氏。日墳協会名誉会長 三井高陽氏。文化庁文部技官 石村速雄氏。沖縄県議会議長 平良幸市氏。共立女子大学教授 山辺知行氏。共立女子学院長 大島孝一氏。青森県議会文教公安委員会一行。日本博物館協会会长 徳川宗敬氏。国土緑化推進委員事務局長 長井英照氏。沖縄国際海洋博覧会協力局長 野島武盛氏。文化庁調査官野口義磨氏。スエーデン大使。文部省社会教育課長 沢田徹氏。同文部事務官 吉沼一氏。国立社会教育研修所主幹 野口博通氏。東京大学教授 窪徳忠氏。
- 12月

# 職員の活動状況

(1972年1月~12月)

## 1. 出張及び調査研究

1. 13 文化財資料(龜)受領運搬のため勝連村へ(上江洲 均・宮城篤正・黒島 悅)  
1. 20 瓦工場調査のため与那原へ(上江洲 均・宮城篤正)  
2. 7 芭蕉布、織物工場調査のため大宜味村喜如嘉へ(大浜用光)  
3. 7~24. 「沖縄の歴史展」への出品管理のため東京へ(館 長)  
3.15~17 民具調査のため国頭へ(上江洲 均)  
4.14~25 「沖縄の歴史展」への出品物管理のため大阪へ(大浜用光)  
4.20 喜名焼調査のため読谷へ(宮城篤正)  
4.25~27 海洋博会場予定地の遺跡調査のため本部へ(新田重清)  
4.26 烧物調査のため嘉手納へ(宮城篤正)  
5. 1~13 「沖縄の歴史展」への出品物管理のため小倉へ(宮城篤正)  
5.12~20 「沖縄の歴史展」への出品物管理のため松山へ(新田重清)  
5.15~23 「還って来た沖縄と国際海洋博展」への出品物管理のため大阪へ(上江洲 均)  
5.26 古我知焼調査のため北部へ(宮城篤正)  
5.28 同 上 (〃)  
6. 1 同 上 (〃)  
6. 8 甲冑受領のため普天間へ(上江洲 均・宮城篤正)  
6.11 陶磁器の調査のため北部へ(宮城篤正)  
6.14 爬龍船行事調査のため糸満へ(上江洲 均・新田重清)  
6.14 陶磁器の調査のため中部へ(宮城篤正)  
6.16 陶磁器の調査のため中部へ(〃)  
6.16 芭蕉布着物調査のため大宜味村喜如嘉へ(大浜用光)  
7. 6 陶磁器の調査のため名護市へ(宮城篤正)  
7.20 陶磁器の調査のため名護市へ(〃)  
7.24~8.29 学芸員講習受講のため東京へ(〃)  
7.25 漆器の保存と修理の件で浦添へ(新田重清)  
8. 6~12 海洋博会場地区調査のため本部へ(上江洲 均)  
8. 6 織物調査のため八重山へ(大浜用光)  
8.12~23 考古学的遺跡の調査と資料の収集のため八重山へ(新田重清)  
8.31 祭の調査のため国頭へ(上江洲 均)  
〃 埋葬遺跡の調査のため読谷へ(新田重清)  
9. 8 古我知焼の借用のため北部へ(大浜用光・宮城篤正)  
〃 " 中部へ(新田重清・上江洲 均)  
9.12 " 北部へ(大浜用光・宮城篤正)

- 9.1 2 古我知焼の借用のため読谷、普天間へ(新田重清・上江洲 均)  
 9.1 7~ 25 第20回全国博物館大会出席のため北海道へ(館 長)  
 1 0.1 2 豊見城城跡の遺物採集へ(新田重清・宮城篤正)  
 " 民俗調査のため大里へ(上江洲 均)  
 1 1.1 4~ 20 九州博物館協議会研修会に参加のため宮崎市へ(崎山孝子)  
 1 2. 8 民俗調査のため浦添市前田へ(上江洲 均・宮城篤正)  
 1 2.1 9 豊見城城跡内の洞窟調査へ(新田重清)

## 2. 著作・論文

- 1.1 5 博物館名品紹介(紅型)(「文教時報」126号)(宮城篤正)  
 1. 欧米の教育事情視察報告記(琉球新報紙上)(新田重清)  
 2. 2~2. 4 「50年前の沖縄遺宝写真展」(琉球新報社紙上)(宮城篤正)  
 3. 1 浦添貝塚の保存をめぐって(琉球政府文化財保護委員会「沖縄の文化財」紙3号)(新田重清)  
 3.1 0 沖縄の美術工芸・民芸(アジア文化研究所「アジア文化」8巻4号)(外間正幸)  
 3.1 0 沖縄の年中行事(アジア文化研究所「アジア文化」8巻4号)(上江洲 均)  
 3.1 4~3.1 7 浦添貝塚の保存をめぐって(琉球新報紙上)(新田重清)  
 3.2 5 沖縄文化史辞典(共同執筆)(琉球政府文化財保護委員会監修)(外間正幸)(上江洲 均)  
 3.2 7~4. 1 沖縄の歴史と文化(四国新聞紙上連載)(外間正幸)  
 3.3 1 荒焼窯雑感(琉球文化社「琉球の文化」創刊号)(宮城篤正)  
 3.3 1 薩摩諸窯をたづねて(「琉球の文化」創刊号)(宮城篤正)  
 3.3 0 スプリングフィールド市における学校視察～サウス イースト ハイスクール(昭和46年度文部省派遣教職員等海外教育事情視察団第22団「海外教育事情視察報告書」)(新田重清)  
 3.3 0 視察感想～海外教育事情を視察して(前掲書)(新田重清)  
 4.2 0 博物館名品紹介(考古資料)(「文教時報」127号)(新田重清)  
 4.3 0 粟国島巣飼原貝塚調査概報(「琉球政府立博物館々報」5号)(新田重清)  
 4.3 0 荒焼の判について(「琉球政府立博物館々報」5号)(宮城篤正)  
 4.3 0 沖縄の貝具(「琉球政府立博物館々報」5号)(上江洲 均)  
 4. 校風について(沖縄県高等学校特別教育活動研究会編「高校生活を考える」)(新田重清)  
 5. 1 琉球文化与中国の関係(日本民芸協会「民芸」233号)(外間正幸)  
 5.1 0 沖縄陶芸の概説(琉球電信電話公社「沖縄の陶器」)(外間正幸)  
 5.2 9 沖縄の伝統美(丹地敏明写真集「沖縄」)(外間正幸)  
 8.2 0 浦添市安波茶の綱引き(「ヤチムン会誌」3号)(宮城篤正)  
 8.2 0 久米島の墓(「ヤチムン会誌」3号)(上江洲 均)  
 8.2 0 博物館名品紹介(扁額)(「教育沖縄」1号)(上江洲 均)  
 9.1 0 「ヤチムン」ノートから(「琉球の文化」2号)(宮城篤正)

- 9.10 琉球の染織について「琉球の文化」2号) (外間正幸)  
9.15 沖縄の梵鍾と金石文(仏教芸術学会編「仏教芸術」88号) (外間正幸)  
10.4 泥臭さの追求(絵画批評)(沖縄タイムス紙上) (宮城篤正)  
10.15 琉球の古陶 I 「古我知焼」(共著) (宮城篤正)  
10.28 荒焼窯雜感(転載) (『窯技』No.29) (宮城篤正)  
10.30 博物館名品紹介(織物) (『教育沖縄』2号) (大浜用光)

### 3 制作活動

5. 第38回旺玄展出品(油絵)=東京都立美術館(宮城篤正)  
9.24~30 洋画個展=沖縄物産センター画廊(大浜用光)  
12.10~14 第6回沖縄旺玄展出品(油絵)=沖縄タイムスホール(宮城篤正)

紙3号)

### 4 講演・普及活動

- 1.5 NHKテレビ番組「中城城跡について」に出演(館長)  
3.25 RBCテレビ第3組 沖縄の心シリーズ「沖縄の民具」に出演(上江洲 均)  
8.3 NHKテレビ番組「話題の窓ー沖縄の民具」に出演(上江洲 均)  
9.5 「生活と文化」について講演。対象:大阪商工会議所セミナー一行。(於東急ホテル)  
(館長)  
9.28 NHKテレビ番組 「話題の窓ー古我地焼由来」に出演(宮城篤正)

間正幸)  
均)

幸)(上江

ール(昭和  
青視察報告書

重清)

5」(新田

# 沖縄県立博物館関係規則

沖縄県立博物館の管理に関する規則（昭和45年5月15日沖縄県教育委員会規則第13号）

## （趣旨）

第1条 この規則は、沖縄県立博物館（以下「博物館」という。）の管理に関し必要な事項を定めるものとする。

## （管理の責任）

第2条 館長は、博物館の施設、設備（備品を含む。以下同じ。）を管理し、その整備につとめなければならぬ。

## （諸帳簿）

第3条 館長は、施設、設備に関する諸帳簿を整理し、その現有状況を明らかにしておかなければならぬ。

## （施設設備の亡失）

第4条 館長は、火災その他の事由により、施設設備の全部若しくは一部がき損し、又は亡失した場合には、すみやかに教育長に報告し、その指示を受けなければならない。

## （警備防災の計画）

第5条 消防法（昭和23年法律第186号）第8条第1項に規定する防火管理者は、館長とする。

2 館長は、年度の始めに警備及び防火その他の防災の計画を作成し、教育長に報告しなければならない。

## （当直）

第6条 館長は、休日その他正規の勤務時間外において職員を輪番で日直又は宿直を命ずることができる。

2 前項に定めるものほか、宿日直勤務については、職員服務規程（昭和47年沖縄県教育委員会訓令第4号）の定めるところによる。

## （職員の服務等）

第7条 職員の服務、勤務時間及び勤務時間の割振については、別に定めるところによる。

## （文書）

第8条 文書の処理については、文書取扱規程（昭和47年沖縄県教育委員会訓令第3号）の定めるところによる。

## （開館時間）

第9条 博物館の開館時間は、午前9時から午後4時30分までとする。ただし、館長は、都合によりこれを変更することができる。

## （休館日）

第10条 博物館の休館日は、次のとおりとす。

(1) 定期休館日 月曜日

(2) 国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号）に規定する日

(3) 年始休館日 1月1日から1月4日まで

(4) 年末休館日 12月28日から12月31日まで。

(5) 臨時休館日 特別の事情により、館長が休館を必要と認めた日

(寄贈及び寄託)

第11条 博物館に、資料を寄贈又は寄託しようとする者は、寄贈申込書(第1号様式)又は寄託申請書(第2号様式)を提出しなければならない。

2 受託を決定したものについては、受託承認書(第3号様式)を交付するものとする。

3 前項の規定により、寄贈を受けた資料は、理由のいかんにかかわらず返戻しない。

(寄託資料の保管)

第12条 寄託された資料の管理は、博物館所蔵の資料の管理に準ずるものとする。

(寄託資料の返付)

第13条 寄託資料は、寄託者の請求又は博物館の都合により返付する。

(経費の負担)

第14条 寄贈又は寄託に要する経費は、寄贈者又は寄託者の負担とする。ただし、館長が必要と認めた場合はこの限りでない。

第15条 寄託資料が火災その他の不可抗力により、滅失し、汚損し又は損傷したときは、博物館は損害賠償の責任を負わない。

(入館券の交付)

第16条 博物館の展示品を観覧しようとする者が、所定の入館料を納付した場合は、入館券を交付するものとする。

(入館の禁止等)

第17条 精神病患者、伝染病患者、酩酊その他館内の秩序を乱す行為のあると認められる者に対し館長は、入館を禁止し又は退館させることができる。

(施設使用の許可等)

第18条 博物館施設(講堂、第2陳列室等で団体又は個人が使用するものをいう。以下同じ)を使用しようとする者は、あらかじめ使用許可申請書(第4号様式)を提出し、館長の許可を受けなければならぬ。

2 館長は、次の各号の一に該当するものを除き、その使用目的に合致し、住民の教育、学術及び文化の発展に寄与するものと認められる場合に博物館施設の使用を許可することができる。

(1) もっぱら営利を目的とする事業を行なうもの。

(2) 特定の政党の利害に関する事業を行ない又は公務の選挙に関し、特定の候補者を支持するもの。

(3) 特定の宗教を支持し、又は特定の教派、宗派若しくは教団を支持するもの。

(4) 社会教育上不適当であると認めるもの。

3 館長は、博物館施設を使用させる場合においては、博物館施設の維持運営のために必要なときに限り、使用の対価を徴収することができる。

(原状回復の義務)

第19条 使用者は施設の使用を終わったときは、使用にかかる施設及び付属設備を原状に復さなければならない。

(損害の賠償)

第20条 観覧者又は使用者が施設、設備及び展示品等を損傷し、若しくは粉失したときは、その損害を賠償しなければならない。

ただし、やむを得ない理由があると認めたときは、館長は、これを減額し又は免除することができる。  
(補則)

第21条 この規則の施行に関し、必要な事項は、教育長の承認を得て館長が定める。

#### 附 則

この規則は、公布の日から施行する。

### 沖縄県立博物館協議会規則

(趣旨) (昭和47年10月2日 沖縄県教育委員会規則第29号)

第1条 この規則は、沖縄県立教育機関設置条例(昭和47年沖縄県条例第24号)第6条第4項の規定に基づき、博物館協議会(以下「協議会」という。)の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

#### (組織)

第2条 協議会は、委員10人で組織する。

#### (委員)

第3条 協議会の委員は、沖縄県教育委員会が任命する。

2 委員は、非常勤とする。

#### (任期)

第4条 委員の任期は2年とする。ただし、委員に欠員が生じた場合における補欠委員の任期は、前者の残任期間とする。

2 委員は、再任されることができる。

#### (会長及び副会長)

第5条 協議会に会長及び副会長を置く。

2 会長及び副会長は、委員の互選による。

3 会長は、会務を総理する。

4 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるとき、又は会長が欠けたときは、会長の職務を行なう。

#### (会議)

第6条 協議会は、必要に応じ会長が招集する。

2 協議会の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。

#### (費用弁償)

第7条 委員はその職務を行なうために要する費用の弁償を受けることができる。

#### (庶務)

第8条 協議会の庶務は、沖縄県立博物館において処理する。

#### (雑則)

第9条 この規則に定めるものほか、議事の手続その他の運営に関し必要な事項は、会長が協議会にかつて定める。

#### 附 則

この期則は、公布の日から施行する。

# 博物館関係条例規則等の抜萃

## 沖縄県立教育機関設置条例（昭和47年5月15日 沖縄県条例第24号）

### （趣旨）

第1条 この条例は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律（昭和31年法律第162号）第30条、図書館法（昭和25年法律118号）第10条及び博物館法（昭和26年法律第285号）第18条の規定に基づき、教育機関の設置について必要な事項を定めるものとする。

### （博物館）

第5条 歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管し、及び展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供するとともに、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行ない、あわせてこれらの資料に関する調査研究を行なうため、博物館を次のとおり設置する。

名 称	位 置
沖縄県立博物館	那覇市首里大中町1丁目1番地

2 博物館は、博物館法第3条第1項各号に掲げる業務を行なう。

### （博物館協議会）

第6条 博物館に、博物館協議会を置く。

2 博物館協議会の委員の定数は10人以内とする。

3 委員の任期は、2年とし、欠員の生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

4 前2項に定めるもののほか、博物館協議会の組織及び運営に関して必要な事項は、教育委員会規則で定める。

### 附 則

この条例は、公布の日から施行する。

## 沖縄県教育機関使用料徴収条例（昭和47年5月15日 沖縄県条例第37号）

### （趣旨）

第1条 この条例は、地方自治法（昭和22年法律第67号）第228条の規定に基づき、教育機関の使用料の徴収について必要な事項を定めるものとする。

### （使用料の徴収）

第2条 教育委員会は、教育機関の施設を使用する者から、別表第1又は別表第2に定める額の使用料を徴収する。

### （使用料の納期）

第3条 使用料は前納とする。

### （使用料の減免）

第4条 第2条の規定にかかわらず、教育委員会は、貧困その他特別の理由があると認めらる者に対しては、使用料の全部又は一部を免除することができる。

(使用料の不還付)

第5条 既に納めた使用料は、還付しない。ただし、教育委員会が特別の理由があると認めるときは、この限りでない。

(罰則)

第6条 虚偽その他不正の行為により使用料の徴収を免れた者は、その徴収を免れた金額の5倍に相当する金額以下の過料に処する。

(教育委員会規則への委任)

第7条 この条例に定めるもののほか、使用料の徴収に関する必要な事項は、教育委員会規則で定める。

附 則

この条例は、公布の日から施行する。

別表第1(博物館の入館料)

使 用 者	入 館 料
大 人	50円
学 生	20円
児 童 及 び 生 徒	10円
団体(20人以上)	1人につきそれぞれ上記入館料の2割引

ときは、

倍に相当

則で定める。

## 研究及び調査報告書

### (紹介)

沖繩古窯出土陶片の理化学的分析…………宮城篤正…………(41.)

コウマツリ警見……………上江洲均…………(49)

(紹介)

## 沖縄古窯出土陶片の理化学的分析

宮 城 篤 正

表題のことについて、去年 当館から佐賀県窯業試験場に、沖縄古窯出土陶片の分析依頼したものに対する結果の報告である。

丁度、筆者が陶片をたずさえて、同試験場を訪れた頃は、沖縄の本土復帰を目前に控え、内外ともにあわただしい時期であった。

その復帰の5月15日をはさんで「沖縄の歴史展」(琉球政府、大阪市立博物館、沖縄タイムス社、朝日新聞社共催)が東京三越(3月7日~3月12日)を皮切りに、大阪(3月18日~4月16日)、名古屋(4月18日~23日)、小倉(5月3日~8日)、松山(5月13日~18日)の五会場巡回展が開かれていた。

小生は小倉会場を担当し、その出品物管理のために出張したが、会期終了後、引き続き佐賀県立博物館で開られた九州博物館大会(5月10日~12日)に参加した。復帰より一足先きに大会初参加とあって、地元の方々をはじめとし、参加者のみなさんが暖かく迎えてくれたのは感激であった。

実は、小生 陶磁器調査のため、その前年に有田を訪れたが、その際に佐賀窯業試験場にも足を運んだ。同試験場では、研究員の杉光正次氏からいろいろお話を伺うことが出来た。その話し合いのなかで、来年あたり沖縄の古窯から採集した陶片を持参したら、貴試験場で分析して貰えるか、どうかについて尋ねてみたところ、その場で、二つ返事を頂いたので、その機会の来るのを楽しみにしていた。

幸いに、去年の五月、出品物管理と九州博物館大会参加を兼ねて出張する機会を得たので、陶片をたずさえて出発した。向こうでの日程の都合をみて、同試験場をたずね、持参した12点の陶片試料の分析依頼をして帰った。

昨年の6月7日付で、それ等の試料についての分析結果が報告書の形式で郵送されてきたが、これみると、なかなか興味深い報告内容である。

この種の化学分析ならびにX線回析図によるデーターを得たのは、おそらく沖縄では、はじめてのことであろう。そういう意味においても同報告書を公表することは意義が深く、かつ研究者の参考に供するものと思う。

なお、データーを提示する前にこれらの陶片試料一覧と各々の出土地などを明らかにするため、若干、説明を加えておいた。また、表題中の「古窯出土」とあるが、なかには必ずしもそうではないものもあるし、「陶片」といえないものなどが含まれていたりしたことについては、まず最初にお断りしておかなければならぬ点である。

番号	記号	試料名	備考
1	あ	高麗瓦片	浦添市「浦添城跡」
2	い	古我知窯陶片	名護市古我知
3	う	喜名窯陶片	読谷村字喜名
4	え	知花窯陶片	美里村字知花
5	お	灰色瓦片	那霸市湧田周辺
6	か	壺川窯陶片	那霸市壺川
7	き	壺屋窯陶片 ④	那霸市壺屋
8	く	〃 〃 ⑤	〃 〃
9	け	バナリ焼土器片	八重山
10	こ	赤瓦片	浦添市
11	さ	白土(陶土)	名護市古我知
12	し	土器片	本部町字具志堅

- №1 ④ 浦添城跡から多量に出土、採集される「癸酉年高麗瓦匠造」在銘、逆文字押印のある古瓦片である。
- №2 ① 名護市(旧羽地村)古我知窯跡から採集した碗の高台部である。この窯跡は去年(昭和47年5月12日)県文化財(記念物)指定を受けているが、沖縄における窯跡の文化財指定は、これが第一号である。
- №3 ⑤ 読谷村字喜名492番地附近の路地の地中には、たくさんの陶片が堆積しているが、その中から採集した陶片である。
- №4 ⑥ 美里村字知花51番地の金城義雄氏宅地内の烟(家の後方にある)から採用した陶片である。
- №5 ③ 那霸市上泉町2の27番地の開南小学校運動場西側におけるプール工事現場から採集(昭和46年4月8日)した灰色瓦片である。
- №6 ② 那霸市壺川240番地におけるアパート建築工事現場〔琉球政府立博物館々報 第4号(1971)ー壺川窯出土陶片調査略述ー参照〕から採集したマカイ(碗)の破片である。
- №7 ④ 壺屋の荒焼甕陶片である。浦添市安波茶72番地の宅地内からの採集である。
- №8 ④ 採集地は№7④と同じ
- №9 ⑦ 八重山から運送中にわれたバナリ焼壺の破片である。
- №10 ② 浦添市安波茶74番地の屋根を葺いていた戦前の赤瓦片である。同場所から採集したもの。
- №11 ③ 名護市字古我知「奥又原」の窯跡附近から採集した白土である。
- №12 ① 考古学で知られている本部町の具志堅貝塚出土の土器片である。

# 沖繩古窯出土陶片について

昭和47年6月 佐賀県窯業試験場

## (あ) 高麗瓦片

原素地は鉄分が $Fe_2O_3$ として8.10%と比較的多く又、チタンも $TiO_2$ として1.02%が含まれていて陶片の素地断面は茶褐色を呈している。X線図を見れば石英の外にヘマタイト(赤鉄鉱) $\text{Fe}_2\text{O}_3$ と微量の長石(曹長石、微斜長石)が認められる。そして陶片に吸水性があることと灼熱損失量( $1g\text{-loss}$ )が1.04%あることから考えると恐らく焼成温度は1050°C~1100°C位ではないかと考えられる。鉄分が多いのは含鉄赤土の使用によるものと思われ、鉄分は焼成により結晶化が進みヘマタイト化しているのが認められる。焼成は還元焼成によるものと考えられる。

## (い) 古我知窯陶片(碗高台部)

断面は灰色で表面は灰褐色無釉の碗である。X線図によればムライト( $3\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{SiO}_2$ )の晶出が明瞭なるから原陶土素地は粘土分の多い陶土を使用したものと考えられる。 $Fe_2O_3$ が2.80%で $TiO_2$ が1.04%あるので相当有色である。焼成温度はSK8(1250°C)R、F(還元炎焼成)位と考えられる。 $K_2O$ (加里分)の2.52%がセリサイト( $K_2O \cdot 3\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 6\text{SiO}_2 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$ )によるものが加里長石( $K_2O \cdot \text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 6\text{SiO}_2$ )に由来するものか不明である。

## (う) 喜名窯陶片

品物はかめの陶片、表面は赤褐色で施釉したものよりも、そうでないものもある。むしろ素地中の鉄分とアルカリ及びアルカリ土類成分による自己施釉の状態ではないかとも考えられる。断面は赤褐色部と黒褐色部との2層よりなり、表側の黒褐色部の表面は褐色で薄く施釉したような状態になっている。斯様な断面の2重層は還元雰囲気により表面側が黒褐色( $Fe_3O_4$ )になったものと考えられる。焼成温度はSK8~9(1250°C~1280°C)R・F(Reduction Fire)と推定される。鉄分は多く $Fe_2O_3$ として9.80%ある。

## (え) 知花窯陶片

かめ類の陶片で喜名窯陶片と陶土素地が類似している。製法はたたき技法によるものと考えられる。又陶片の断面の2層構造もよく似ている。この陶片から察するに施釉品ではなく自己施釉(Self Glazing)によるものではないかと考えられる。焼成温度はSK8~9 R・F位であろう。

## (お) 灰色瓦片

いぶし瓦陶片である。原素地土は喜名窯や知花窯の陶片に比較しやすく粘土分が少いが高麗片とはよく類似している。

鉄分は多く $Fe_2O_3$ として7.40%含まれている。いぶしによる還元焼成で瓦の表面は黒ねずみ色となりカーボン化又はグラファイト化がすんでいる。焼成温度は1050°C~1100°C R・Fであろう。灼熱損失量( $1g\text{-loss}$ )が1.46%あるので未だ吸水性が残存していることが考えられる。X線図によれば陶片には尚セリサイト(絹雲母)のピークが認められることから焼成温度は1050°C近くである。

(セリサイトの分解が完全にすんでいない。)

## (か) 壺川窯陶片(茶碗陶片)

碗の内側には土灰釉、外側には天目に似た黒釉がかけられている。X線図によればムライト( $3\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{SiO}_2$ )の晶出が認められることから焼成温度は8K7(1230°C)R・F位かと考えられる。

## (き) 壺屋陶片(A)(赤褐色陶片)

壺屋陶片の特徴として原素地土中に可なりの石灰と少量の苦土を含むことである。鉄分は $Fe_2O_3$ とし

て 8.30%、石灰分は CaO として 4.67%、苦土分は MgO として 2.30% である。X線図によれば灰長石 Anorthite ( $\text{CaO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{SiO}_2$ ) の晶出が認められる。これは高温焼成により粘土が石灰と反応し、灰長石を晶出したものと考えられる。又鉄分が多い ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$  として 8.30%) ことから X線にはヘマタイト ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) のピークも確認できる。焼成温度は SK 1a ~ 4a (1,100 ~ 1,160°C) O.F (Oxidation Fire 酸化炎焼成) 位かと考えられる。

#### (く) 壺屋陶片 (B)

茶褐色のかめ類陶片である。原素地土は壺屋陶片 (A) と大きな差違はない。焼成色の赤みが壺屋陶片 (A) に比較しやすいこげ茶色がかつている所から焼成温度がやゝ高く SK 4a ~ 6a (1,160°C ~ 1,200°C) O.F 位と察せられる。

#### (け) パナリ焼土器片

陶片の断面を見れば白色粒状物質が一面に散在している。恐らく石灰であろう。陶片の化学分析値は石灰分が CaO として 1.174% 含有していることを示している。X線図によれば石灰分は 石灰石 (Calcite  $\text{CaCO}_3$ ) の形でそのまま残存している。即ち粘土分と反応しているものは認められない。然かも Ig-loss (灼熱損失量) が今尚 1.254% あることからも石灰石の分解が行なわれていないことが分る。即ち石灰石が  $\text{CaCO}_3 \rightarrow \text{CaO} + \text{CO}_2$  の反応式の示すように分解する温度は 900 ~ 1,000°C 位であるのでこの陶片の焼成温度は 800°C ~ 900°C 近くではあるまいかと想像される。即ち陶片は土器に近い石灰質陶器の類である。

#### (こ) 赤瓦片

鉄分の含有量は多く  $\text{Fe}_2\text{O}_3$  として 1.220% ある。外にチタンが  $\text{TiO}_2$  として 1.16%、苦土が MgO として 1.19% 含まれている。X線図によればムライトの晶出は認められず Ig-loss が 1.64% もあることから焼成温度は 1,050 ~ 1,100°C 位であろう。陶片の焼成色から判断して酸化炎焼成と考えられる。

他の瓦即ち高麗瓦片や湧田窯瓦片に比較しその原素地土はやゝ粘土分と鉄分が多いようである。又前者が両方共還元炎焼成であつたがこの赤瓦は酸化炎で焼成されたものである。

#### (さ) 白土 (陶土)

外観は微淡黃白色で軟い粘土質白土である。X線図によれば石英 ( $\text{SiO}_2$ ) の外に粘土鉱物としてハロイサイト (Halloysite  $\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{SiO}_2 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$ ) とセリサイト (絹雲母) (Sericite  $\text{K}_2\text{O} \cdot 3\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 6\text{SiO}_2 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$ ) を含有している。鉄分が  $\text{Fe}_2\text{O}_3$  として 3.00% 又、チタンが  $\text{TiO}_2$  として 1.08% あるので焼成すれば可なり有色な素地となる。然し粘土分が十分にあるので可塑性もあり且つ成形能も十分あると考えられる。SK 8 ~ 9 (1,250 ~ 1,280°C) 焼成して磁器にすることも出来よう。

#### (し) 土器片

化学分析値の石灰分 CaO として 5.18% あるのは粘土中に含まれる貝殻に由来するものであろう。貝殻の鉱物組成はアラゴナイト (Aragonite  $\text{CaCO}_3$ ) で石灰石 (Calcite  $\text{CaCO}_3$ ) と同質異像である。500°C 以上に熱すれば石灰石と同じような示差熱分析曲線を示し 900°C ~ 1,000°C で  $\text{CO}_2$  (炭酸ガス) を放出しカルシヤ ( $\text{CaO}$ ) となる。この出土陶片のX線図を見れば  $\text{CaCO}_3$  (炭酸カルシュウム) のピークが僅かに残っているし又、灰長石一斜長石と思われるピークが僅かに認められる。一方化学分析値によれば Ig-loss が尚 1.248% あることから粘土鉱物中の構造水も完全には脱水されていない。従つて焼成温度も 700 ~ 800°C 位ではないかと推定される。12 の試料のうちでは最も古い陶片だと考えられる。土器から陶器への発達過程の陶片と考えてもよいであろう。

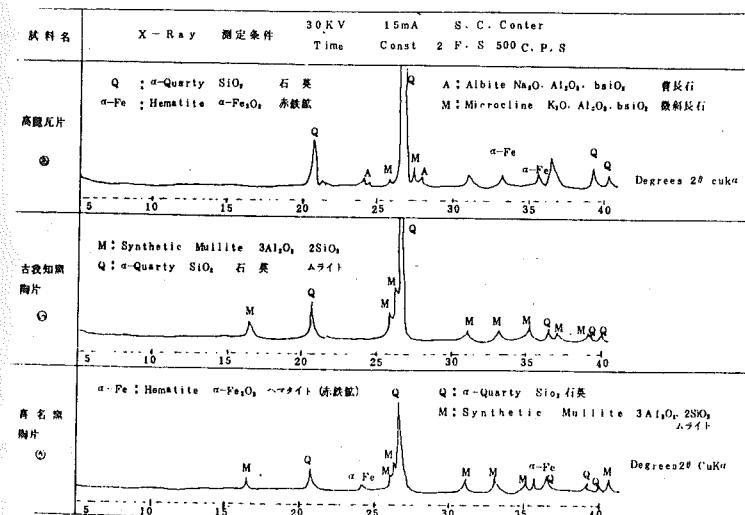
# 沖縄古窯出土陶片の化学分析値

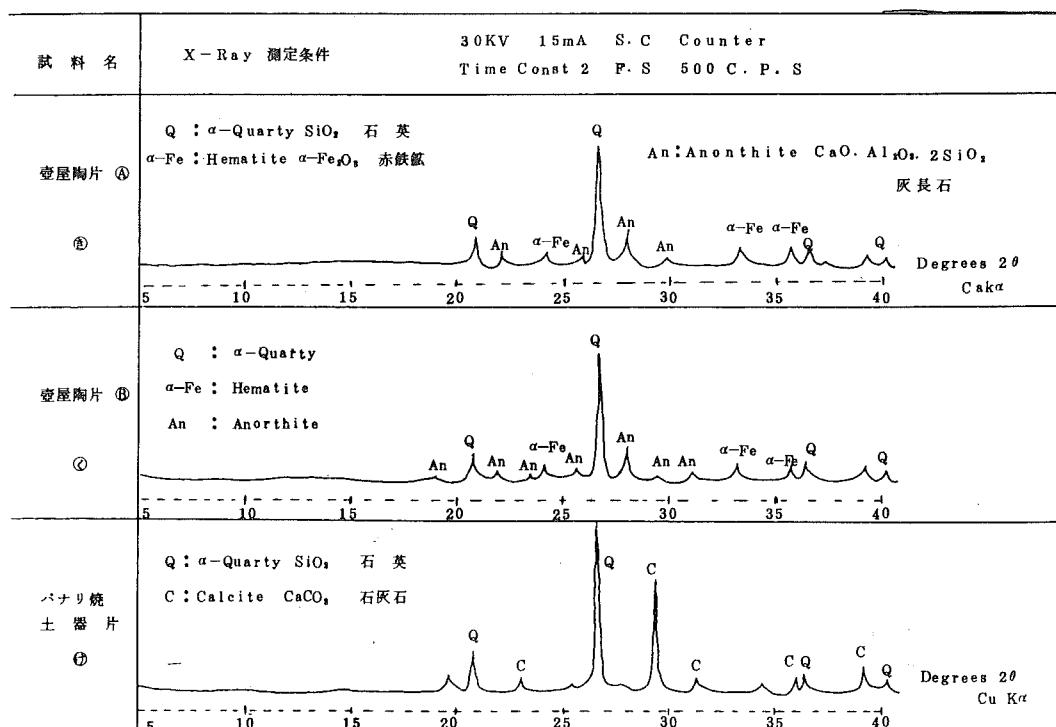
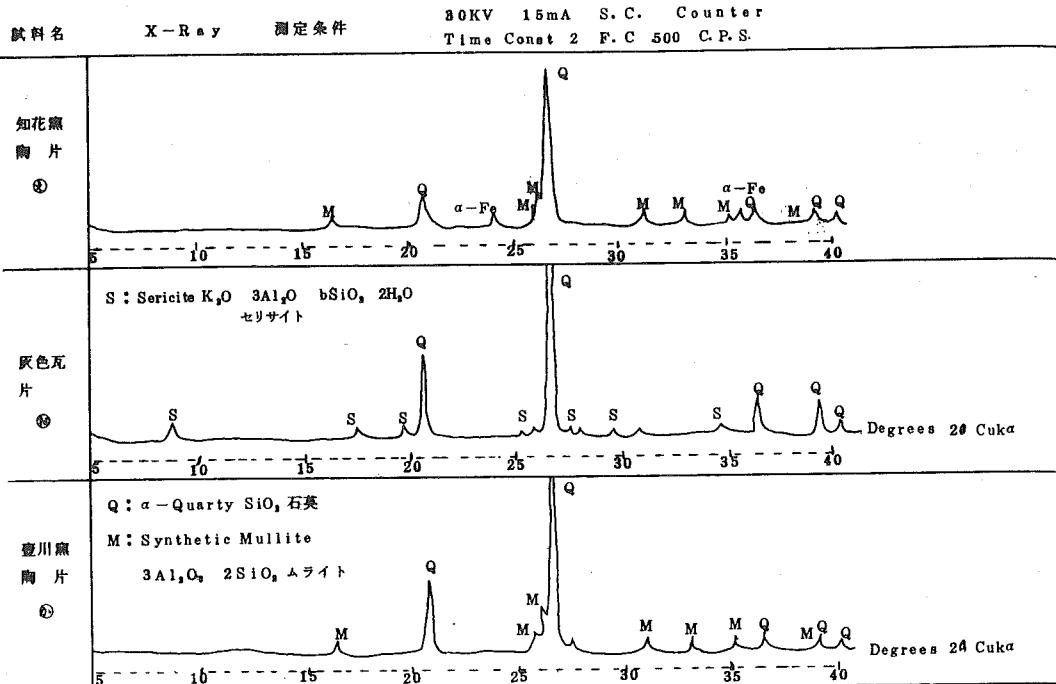
昭和47年6月 佐賀県窯業試験場

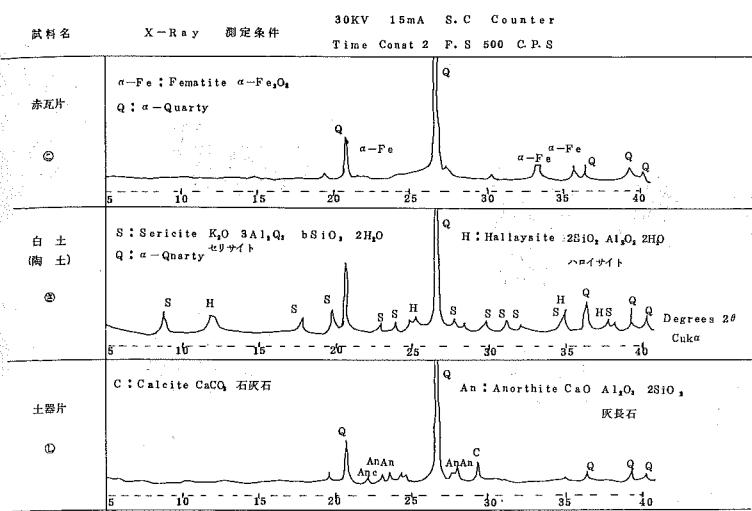
試料名 項目	高麗瓦 片	古我知 窯陶片	喜名窯 陶片	知花窯 陶片	灰色瓦 片	壺川窯 陶片	壺屋窯 陶片①	壺屋窯 陶片②	パナ焼 土器片	赤瓦片	白土 (陶土)	土器片
灼損 Ig-loss	1.04	0.16	0.24	0.38	1.46	0.72	0.86	0.72	12.54	1.64	7.32	11.48
珪酸 $\text{SiO}_2$	66.90	70.87	61.68	63.67	67.80	72.76	58.80	60.26	46.20	60.37	64.53	46.27
礬土 $\text{Al}_2\text{O}_3$	17.04	21.80	22.24	21.06	17.00	18.56	20.26	20.22	17.16	20.40	20.36	27.16
酸化第二鉄 $\text{Fe}_2\text{O}_3$	8.10	2.80	9.80	8.30	7.40	2.24	8.30	8.00	6.60	12.20	3.00	6.50
酸化チタン $\text{TiO}_2$	1.02	1.04	1.24	1.12	1.08	0.80	0.96	1.02	0.96	1.16	1.08	0.70
石灰 $\text{CaO}$	0.53	0.04	0.65	0.23	0.77	0.45	4.67	3.76	11.74	0.52	0.04	5.18
苦土 $\text{MgO}$	1.88	0.81	1.31	1.55	1.56	0.98	2.30	2.30	1.64	1.19	0.49	1.03
曹達 $\text{Na}_2\text{O}$	1.04	0.28	0.40	0.56	0.64	0.38	1.00	1.00	0.64	0.46	1.06	0.82
加里 $\text{K}_2\text{O}$	2.54	2.52	2.40	3.06	2.64	3.60	3.10	3.00	2.40	2.14	2.20	0.90
合計	100.09	100.32	99.96	99.93	100.31	100.49	100.25	100.28	99.84	100.08	100.08	100.04

## 沖縄古窯出土陶片のX線回折図

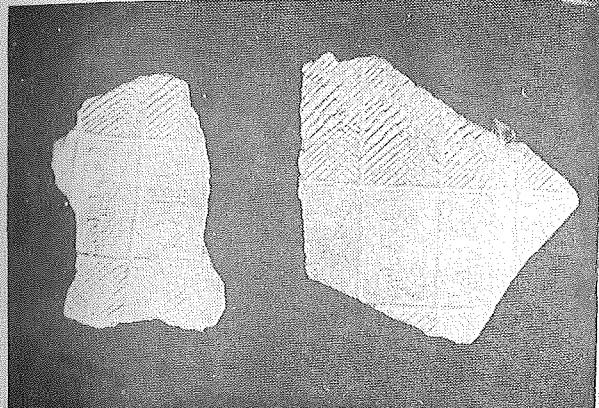
昭和47年5月 佐賀県窯業試験場



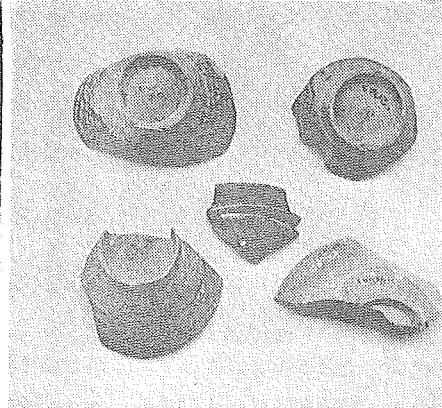




### <参考資料>



② 高麗瓦片



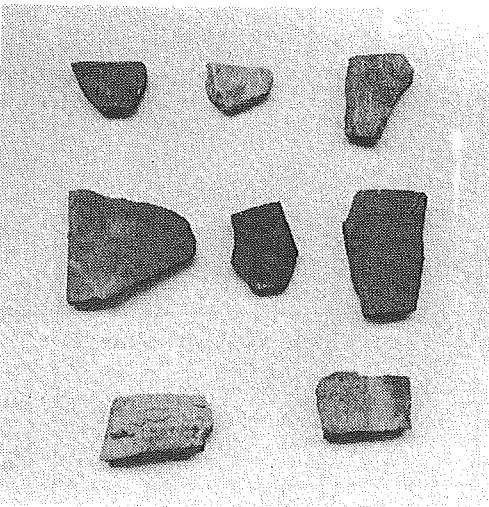
② 古我知窯陶片



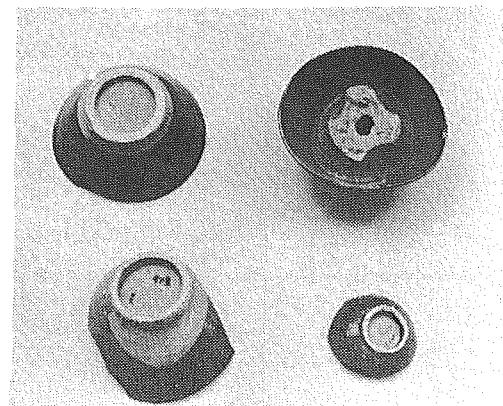
④ 喜名窯陶片



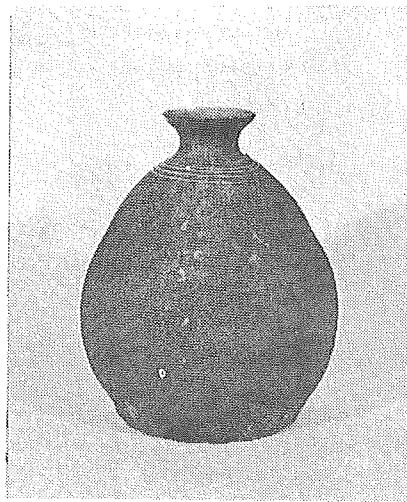
③ 知花窯陶片



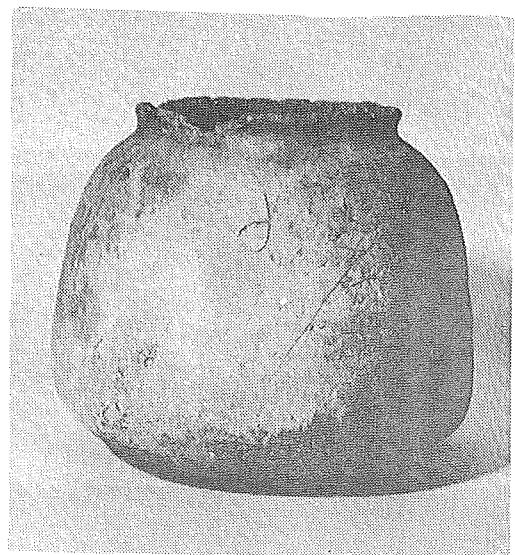
◎ 灰色瓦片



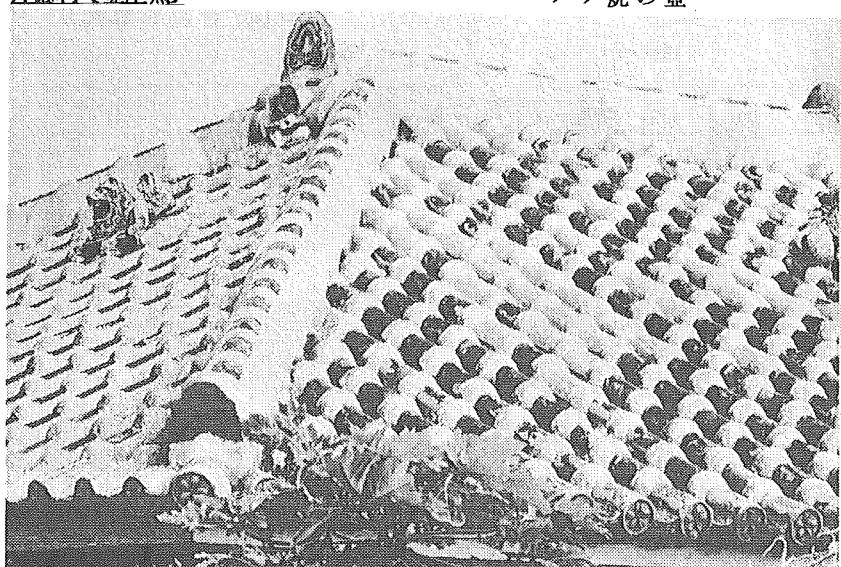
◎ 壺川窯出土品



荒焼一升徳利（壺屋窯）



バナリ焼の壺



赤瓦屋根

# コウまつり 覧見

上江洲 均

「コウ」とは葬具の龕のこと、一般には「ガン」と呼ぶことが多い。コウの語源はつきりしないが、明治43年の『久米島事情』という記録によると「棺を共同コーロ(合籠)に入れ葬送、墓前に於テ棺ヲ出し其棺ヲ墓内ノ前面中央ニ安置、葬儀ヲ終ル」とあり、「コーロ」と呼んだらしいことがわかる。これを所により「ゴウリュウ」と呼ぶ地方がある。龕の字を分解して「合籠」としたのであろう。「コーロ」もあるいはそれに関係がありそうである。すると「コウ」もまた無関係ではないように思われる。しかし、現在一般に聞くのは「ガン」が多く、久米島に於てさえそうである。

ここで、中城村津覇部落の「コウまつり」についての写真紹介をしておきたいが、その前に少しばかり龕について述べておきたい。

○

乾隆2年(1737年)の『服制』には喪服のほか王子以下田舎衆中に至るまでの葬礼定が記録されている。そのうち「田舎衆中葬礼定」には次のようにになっている。

一、四流旗

一、腰打燈炉一対、但無位ノ者ハ無用致シ候トモ心次第

一、天蓋

一、坊主 但座敷勢頭座敷迄ハ式人 黄冠以下壇人、尤モ坊主無ニ相済來候方ハ其通

一、念佛壇人 但念佛無ニ相済方ハ其通

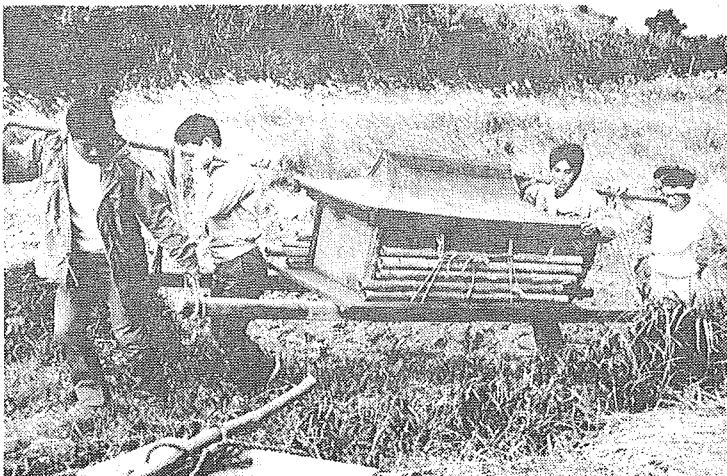
一、座敷位タリト雖モ幕引候儀無用ノ事

一、塚屋右同断

地方においては、幕や塚屋は言うまでもなく、時には家屋や墓に至るまで必ずしも定め通りでなかつたばあいがある。百坪前後であるべきはずの屋敷が数百坪であつたり、六畳間までの制限を破つて八畳十畳間にしたり、六間角の墓

を申請していく、それ以上といふことがあつたのである。

ところが、前記『久米島事情』によれば、「死者ノ墓前ニ小屋掛ヲ為サムルハ当地ノ習慣ナリ」とあり、『服制』の「塚屋無用ノ事」に一致している。



龕を運ぶ（浜比嘉島にて）

「四流旗」は四枚の幟で、それには次のような文字が書かれている。

- 一、諸行無常
  - 二、是生滅法
  - 三、生滅々已
  - 四、寂滅為樂
- これに更に仏、法、僧、宝の一宇ずつを加えることもある。

また龕の四隅には木札を下げるが、「南無阿弥陀仏」だけで片づける例があるが、浜比嘉島の例によると四通りの札を吊つたようである。「悟故十方空」「本来無東西」「南無阿弥陀仏」「迷故三界城」の四つである。

天蓋の旗にも「何處有南北」の文字を書いたようである。「天蓋」とは「ティンガー」といい、葬列の前を行く龍頭である。竿に龍頭を立て、その下に幕を引いたものである。昔葬儀の度に魔物が出でては災いした。困った人々は、その魔物に似せて作ったのがこのティンガーで、それからは魔物も人間界にも自分に似たのがいることを知り、姿を見せなくなつたという話がある。葬具の中でも特に恐れられて来たものである。

前記『服制』には龕のことが少しも出て来ない。伝承によれば、昔は「山龕」というのを臨時に作ったのだという。棺を置けるように丸木を組み合わせ、その前後左右には法師像などを描いた布を垂れて運んだそうである。部落には、4流旗や法師像の布を箱に入れて常備したが、部落に死者の出る前ぶれとして、その箱がガタガタ鳴ると信じられていた。この箱を久米島では「セーレバク」と言った。「精靈箱」の意であろう。セーレバクは部落共同のものだが、富裕の者になると自宅で常備することもあつた。昨年、久米島の旧家でそれを見たことがある。ずいぶん前に天井を掃除していて見つけた

ものらしいが、芭蕉布に描いた彩色の法師像が六枚、今でも使用にたえるほど保存のよいものであつた。それと思われるものが一つ博物館にある。

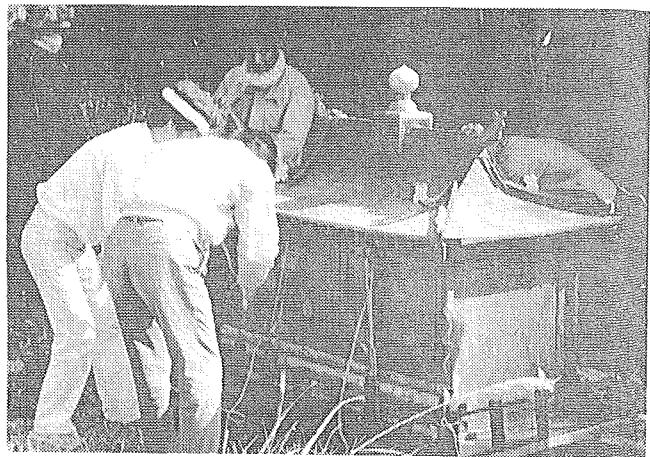


山龕の話、繩やモッコで運んだ話もある中で、現在見るような龕の伝来や始まりについて詳らかではない。

小児言葉で「赤馬」といわれる龕は、入母屋型の輿である。全面に漆塗が紅がらを施しているところから「赤馬」の呼び名が生まれたことだろう。龕小屋（ガン屋といふ）に普段置く時は、すべての装飾をはずし、仏像や蓮華を描いた戸を下し、35センチ前後の板戸をはめておく。二本の取っ手の長さ凡そ3メートルに、ちゃんと組み立てて棺を入れるようにした時の高さ1メートル30センチ、屋根の長さがそれぞれ150×95センチ前後である。浜比嘉の龕で言えば、前面両面には法師像、側面4面には蓮華が描かれている。屋根の中央には宝珠を置き、両端には鯱をのせる。どう見ても御殿



部落獅子（大里村南風原）



龕の飾りをつけたところ（浜比嘉島）



糸満家の火の神前で(新旧の獅子の魂入替え)



頭髪をそがれた古い獅子頭

または神社仏閣の模型という感じである。これは、洗骨後に使う石厨子、陶製屋型厨子にも広く見られるタイプで、たぐつていけば、根本はどこかで結びついているに違いない。

浜比嘉島の龕は、若者の少なくなった現在、壮年の人たちが持つとあって、その労苦に堪えられず、軽金属による龕をつくって元のものは博物館入りしたのであった。火葬になつたが、やはり火葬場まででも何らかの葬具がなければいけないわけである。1969年の秋、伊計島では偶然に葬列に出くわしたことがあつたが、あまりの驚きについて写真を写しそこねたのを今もって悔まれる。古い龕はもちろん、ティンガーなどの葬具も揃えた本式の葬列だったのである。古い記録にあるようなものではなかつたかもしれないが、靈柩車ならぬ貨物車に棺のままで乗せて田舎道をガタゴトすつ飛ばす島に比べれば、それこそしめやかな野辺の送りである。しかし、さすがに悲涙。悲嘆の声は聞こえず、衣類を頭に被る姿も見られない。

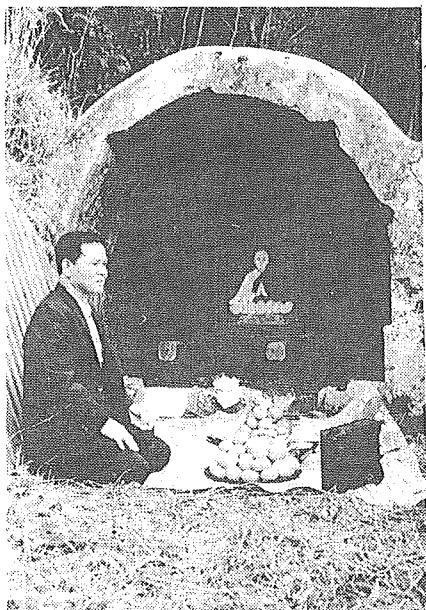
さて、龕は修繕が定期的に行なわれる。浜比嘉島のばあいは、戸板の裏の記録によれば最初の修繕は、明治42年(酉年)である。これが一番古いので、たぶんその12年前の明治30年頃に造られたのではないかと考える。大正10年頃が見えないが、昭和10年、1947年(昭和22年)昭和34年の文字が見える。最初酉年だったのが、昭和に入った頃から亥年になっている。そして昭和46年の亥年を契機に新しいのに替えたのである。

○

修繕に関することではないが、大里村南風原では以前は毎年8月15日には「コウマツリ」があつたという。これはシーシ(部落内にある石獅子)とも関係が深く、その前で棒踊りを演じたのも龕屋の前へ部落中の人人が集まつて「コウマツリ」が行なわれた。その日は部落で一頭の豚を殺し、肉を「チザカナ」といって竹串に差して全員に配つてにぎやかにすごした。この獅子は、部落のやや中央にあつて、北のフィーザン(火気を寄せる山)を睨みすえている。側には溜池が以前はあつておよそ150年前に立てられた獅子だということである。この獅子は火の厄を入れない返しであると同時に、龕について来る邪魔を払う役員も持つていたことがうかがえる。

読谷村のある部落の「行事表」を見ると、その末尾に次のような記述がある。

「読谷村には、三祝女(野殿…『ノロ』)、龕三つ、獅子三。三祝女…座喜味 瀬名波 大湾



龕屋（中城村津覇）

獅子…渡慶次 伊良皆 古堅  
龕…瀬名波 喜名 大湾（夫婦）

これは、獅子と龕は「夫婦」のようなつながりの深いものであると述べている。ここで言つてゐるのは獅子舞の獅子で、龕は二部落で共有していたのであろう。

○

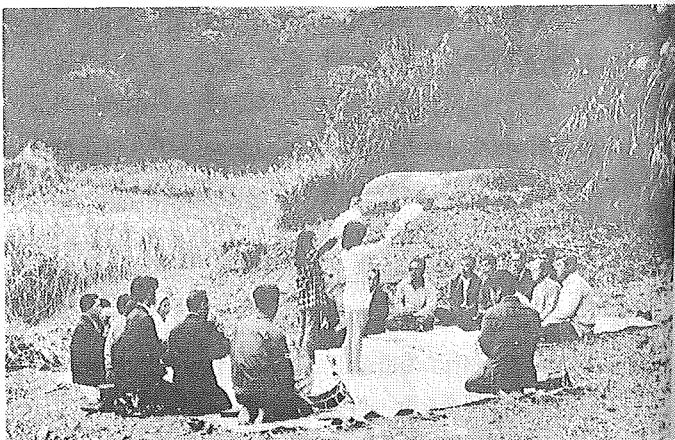
中城村津覇の「コウマツリ」は、9年に一度の龕修繕で、同時に獅子舞の獅子のつくりかえもある。本来なれば8月15日であるが、今回は獅子頭づくりに手間取り、12月24日（新）に行なわれた。前日で龕屋を掃除し、24日には正午ごろから、獅子をおいてる糸満という家の「火の神」で願立てをし、津覇小学校の西側にある龕屋でまた菓物類を供え、専門のウクワンサーが祈りをする。この龕屋は、石灰石のマチ（アーチ状の覆い）をかけたもので、ふつうに見られる瓦葺、コンクリート造りに較べ、はるかにすばらしいものである。祈禱がすむと、部落のシーシニンジュといいうるものである。

獅子舞関係者も拝み、それがすむと会場を隣接の広場へ移す。そこへ敷物を敷き、三味線、太鼓の音曲に合わせて子供が「御前風」を舞い、龕屋での儀式を終える。その後、さらにもう一度糸満家での拝みがあるそうだが、それは見ていないので記述をひかえる。公民館には舞台を作つてあり、午後からは大がかりな部落行事が舞台を中心に行なわれたようである。

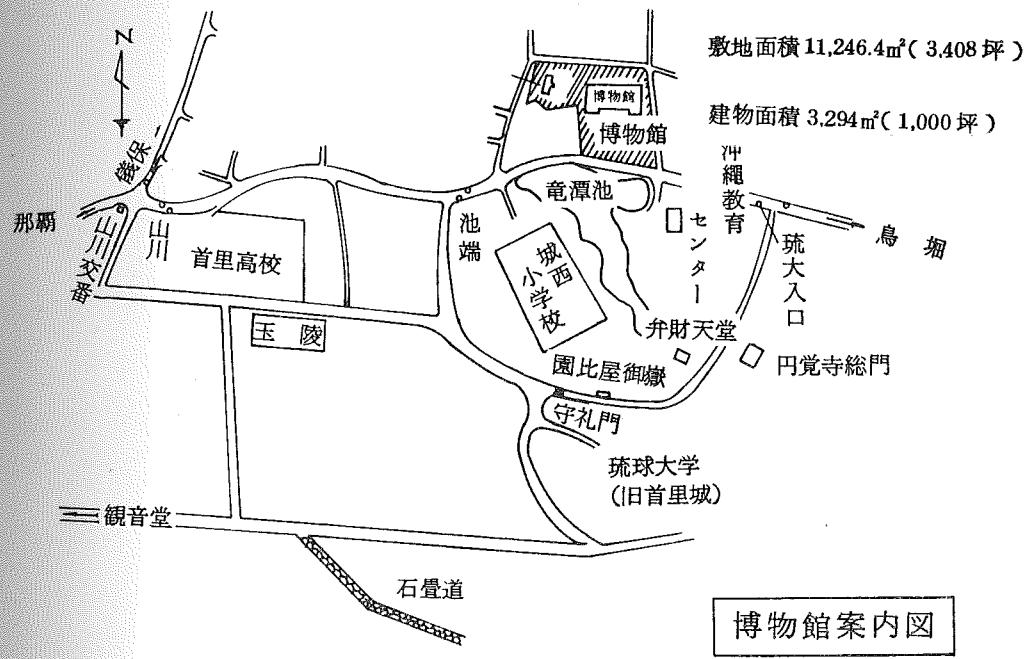
戦前は、龕の修繕を終えると、部落内の要所要所を担ぎまわった。その後から獅子を踊らせ、大通りへ出ると龕は龕屋へ収納し、獅子は部落内へ引返したということである。

獅子は梯梧の木で作るが、海水で煮こむなど彫刻する以前の準備も大へんである。それに頭髪には馬の尾を使うが、今では馬飼育が皆無に近く、部落内で新しく徵發することは困難で、古い獅子頭からそぎ取つてつけねばならなかつた。

こうして、龕の修繕と獅子の作り替えを9年に一度の割で行なつてゐる。獅子舞は正月2日、7月16日、8月15日の3回行なわれてゐるが、龕は用済みとなり、しかしそれでも龕屋の主として、9年後の「コウマツリ」を待つのである。



龕屋横の広場で御前風を舞う



## 案 内

名 称 沖縄県立博物館

所 在 地 沖縄県那覇市首里大中町1丁目1番地 電話 32-2243

### 開 館 日

日・火・水・木・金・土

午前9時～午後4時30分(但し、入館券の発売は午後4時まで。)

### 休 館 日

毎月曜日、公休日、その他陳列替等による臨時休館日

年末年始 12月28日～1月4日

### 入 館 料

大人 50円

学生 20円

児童生徒(高校及び小中学生) 10円

※ なお20名以上の団体見学は2割引

◎ バス……………首里バス「開南線」池端又は琉大入口停留所下車、徒歩で2分

沖縄県立博物館